AACK 京都大学学士山岳会 No.60

Newsletter

April 2012

http://www.aack.or.jp

目次

追悼
近藤良夫氏（名誉会員）
弔辞 上尾庄一郎……1
兄、近藤良夫の思い出 近藤公夫……2
近藤先生の思いで
―AACK会長とカンベンチン登山隊長―
西山 孝……3
吉良龍夫氏
若き日の吉良さんとAACK
斎藤清明……5
追悼 吉良竜夫先生
―森林生態系の解明―
岩坪五郎……6
吉良龍夫先生・泰子さんと共に
伏見紀子……8
松本徑夫氏
松本徑夫先生を偲んで
倉智清司……10
菊池卓郎氏
菊池卓郎君
―らしくない新人―
寺本 巖……13
菊池卓郎君追悼
井上トッキュウ……15
人見五郎氏
マサ・コン峰初登頂と人見君
横山宏太郎……15
人見五郎
牛田一成……17
人見五郎さんを偲んで
吹田啓一郎……19
YMCA主事宅の日々
伊藤宏範……20
ひとみハイガさんの思い出
山田和人……22
ありがとう。ハイガさん。
中山茂樹……23
私の京大山岳部
一九六〇年代を中心に（連載・第二回）
吉野熙道……26
日本山岳協会山岳共済会および山岳遭難・捜索保険の案内……31
会員動向……36
編集後記……36

追悼 近藤良夫氏（名誉会員）

二〇一一年四月一日逝去

弔辞

上尾庄一郎

近藤良夫先生は冶金学および品質管理の領域で素晴らしい業績をあげられたことは広く知られておりますが、それ以外に、登山でも大きな業績を残されました。

旧制第三高等学校山岳部は、今西錦司、西堀榮三郎、桑原武夫、四出井綱彦先生などが在学中に日本アルプスを舞台に新ルートの開拓、積雪期初登頂などに大活躍をされた伝統を引き継ぐ、日本有数の山岳部でしたが、近藤先生は三高入学後この山岳部に所属し、活発に登山に励まれました。私が京大山岳部に入部したのは昭和三十一年（一九五六年）ですが、その頃新進助教授であられた先生は毎年妙高高原笹ヶ峰にある京大ヒュッテでの新入部員スキー合宿に参加し、寝食を共にして三高山岳部伝統の山スキー術を京大山岳部に伝授することに努められました。おかげで、初めてスキーをはいた新入部員も合宿が終わるころには、何とか山スキーができるようになったものです。

昭和六年（一九三一年）今西錦司先生らは自らの夢であるヒマラヤ高峰の初登頂を実現することを目的とした京都大学学士山岳会を創設し、具体的な目標の山を設定して活動を開始されましたが、戦争のため実現にはいたりませんでした。しかし、戦後、ようやく世の中が落ち着いてきた一九五一年ごろから活動を再開し、一九五二年には西堀榮三郎先生がネパールに入国し、八千メートル峰マナスルの登山許可を取得されますが、これはオールジャパンで実行すべきとして、日本山岳会に移管されてしまいました。一方、京大学士山岳会は一九五三年独自に最初のヒマラヤ遠

平成12年に勲二等
旭日重光章をご受章

若かりし頃・年代、場所不詳

征隊をネパールのアンナプルナⅡ峰に派遣しますが、この隊は登頂に成功しませんでした。しかし、一九五八年の桑原武夫先生を隊長としてカラコルムのチョゴリザ初登頂以後は、一九六〇年酒戸弥二郎先生を隊長にアフガニスタン最高峰ノシャック初登頂、一九六二年四出井綱彦先生を隊長にカラコルム、サルトロカンリ初登頂、一九七三年には西堀榮三郎先生を隊長に当時世界最高の未登峯八千五百メートルのヤルンカン初登頂に成功するなど大きな業績をあげました。

近藤先生はこの間もっぱら各遠征事務の責任者として、また遠征隊が出発後は留守本部の責任者として、重要な裏方の仕事に黙々と当たられ、登頂成功の陰の功労者でした。

近藤先生が京大学士山岳会会長を務めておられた一九八〇年代になりますと、中国は自国領内での外国人の登山を少しずつ解禁するようになりました。この機をとらえ一九八二年、京大学士山岳会は近藤先生を隊長としてチベットのカンペンチンに学術登山隊を派遣することを決め、私も副隊長として参加することになりました。先生は、勝手の違う中国との交渉もうまくこなし、また精力的に募金活動をされた結果、遠征隊は無事に日本を出発し、北京、成都を経由して、チベットの首都ラッサに入ることができました。ところがベースキャンプを目指し、ラッサから車で出発し五千メートルの峠を越えた後の宿泊地で、先生は突然高山病を発症されました。

先生は松林公蔵医師の的確な判断と陳　介臣通訳隊員の交渉力のおかげで、最短時間でラッサ経由京都の病院まで移動され、入院治療ののち無事に回復されました。計画では先生はベースキャンプに滞在し、遠征隊全体を指揮される予定でしたので、先生の不在は大きな痛手でしたが、隊員一同団結し登山活動にあたった結果、登攀隊員全員が登頂することができ、かつ各種の機器を持ち込んでの高所医学調査も遂行できました。後に帰り着いた北京では元気になられた近藤先生と再会し共に遠征隊の成功を喜びました。

この遠征の成功を契機に以後京大学士山岳会はもっぱら中国で活動することになりました。

以上、近藤先生の登山活動の一部を紹介させていただきました。

ここに元会長として京都大学学士山岳会を代表し、また多くの後輩の山仲間を代表して、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

二〇一一年四月五日

兄、近藤良夫の思い出

近藤公夫

平成二十三年四月一日、近藤良夫名誉会員は呼吸器不全のため他界いたしました。

ＡＡＣＫからは上尾会員に御弔辞を頂き、また有志の方々に通夜・告別式への参列を賜わり、去る五月十四日、無事に四十九日の法要を終りました。

会員名簿に名を連ねて来た弟として心から御礼を申し上げます。

京都一中四修から三高へ進んだ兄は出来の良い秀才の典型として定年まで京大に勤め、京大山岳部長もやらせて頂きましたが、五人兄弟の次男として頼りない四男の小生に気遣いしてくれた厳しい兄でもありました。

昭和十年、私の小学校入学時には六年生の級長として弱虫の弟がいじめに会わないよう考えていた気配も思い出されます。

昭和二十三年、私が三高に合格すると入学式前から山岳部の山行に同行させて否応なしの入部。それが夏山に同級の広瀬（故人）などと黒部源流に敗走、秋山は立場川から風雨の八ヶ岳をこなしたものの春山の笹ヶ峰合宿は広瀬と共に雪盲になって叱られ、再び夏山には立山東面で遭難手前の滑落にお目玉など、兄の顔に泥をぬったのを思い出します。

三高山岳部として最後の山行となった春山の劔は一週間の吹雪で立山の山頂を踏んだだけに終り、京大でも山を続けた広瀬に較べ、林学へ進学して山が生活になった私は部生活

を退き、兄には不満もあったようでした。
それでも昭和三十七年のカラコルム遠征当時、パキスタンのイスラマバード計画に唯一人の日本人として活動していた私の話を隊長の四手井先輩に聞かされたのか、少し誉めてくれた時もありました。ただ、その帰国後、私に京大から奈良女子大へ転出の話があった時は「俺は反対だ」と良い顔はしなかったものです。
兄が品質管理の分野に進出したのは言うまでもなく西堀先輩の感化や指導による訳ですが、土木材料学を講義していた父が品質管理の必要を強調していた影響があったかも知れません。三高では西堀さんに声をかけられた記憶もありますが「君は兄さんと違うな」の言葉が耳にしみついています。研究者と計画家の違いも見られたのでしょうか。
昭和五十年代の末に父が亡くなる前後、五人兄弟のとりまとめに兄も苦労したようですが、京大の定年から八十才をこえるまで約二十年間は世界を股にかけ、国際的にも学界をリードする得意の時代でした。時々、兄夫妻と二家族で夕食を共にし「縄文とか弥生とか、お前が歴史に首をつっこむとは…」と呆れさせた一方、「俺が日本の産業活動を支えるような学問をしているから、お前に出番があって公園やら緑地やら後に遺る作品が作れるのや」と釘を刺されたものです。
また学士山岳部の名簿を見ては「なんで公夫、良夫の順で、お前が先やね」と軽口を叩いていましたが、京大で山岳部を続けなかった私の昔話には触れませんでした。
八十才をこえて海外の活躍をひかえドバイへの出張から体調がもどらず、この一年余りは一進一退をくりかえしましたが、妻が「また一緒に御馳走を喰べましょう」と言った時は嬉しそうな顔をして、愚弟なりに賢兄への良い思い出を作れたのかと自分を慰めたものです。
末筆になりましたが兄の入院中は多くの方々にお見舞いを頂き御心配をかけました。重ねてあつく御礼を申し上げます。

近藤先生の思いで
―ＡＡＣＫ会長とカンペンチン登山隊長―

西山　孝

近藤先生には学士山学会と研究の両面でお世話になりました。一九六一年、入部まもなくＡＡＣＫの先輩に近藤先生がおられ、バリバリの若い教授で専攻分野も私に近いことを知りました。しかし、学部、大学院の頃はときどきお会いした折に立ち話をする程度でした。親しくしていただくようになったのはＡＡＣＫの会長になられ、突然、事務局をやってみないかと言われたときからです。七次南極観測隊では事務を手伝った経験はありましたが、個性豊かな大先輩の多い会の裏方をやれるかどうか迷い、もたもたしているうちになんとなく決まったように思います。間もなく開かれた総会では西山は事務局になれておりませんのでといって、事業報告を自らやってくださり、いたく反省しました。その後はＡＡＣＫだけでなく研究室のごたごたにも、たびたび相談にのっていただき、アドバイスをいただきました。
ＡＡＣＫ会長としての初めての仕事はＫ12の事故調査委員会だったと思います。いろいろな厳しい意見が出ました。ときにはこんな机上の調査などやっても意味がないという声までささやかれるなかで近藤先生と山口先生のご尽力でうまくまとまりました。この報告書がＡＡＣＫにとっての区切りとなり、活気が戻ってきました。やがて迎えた創立五〇周年の記念パーティ（一九八〇年）がおこなわれたころには、この五〇年に果たせなかったヒマラヤ山脈の北面からの登攀の可能性が生まれてきました。ＡＡＣＫは登山目標に戦前からの話題になり消えていたグルラマンダータ（ナムナニ）をはじめ登攀を希望する五つの山をあげ、あらゆる機会をとらえて中国への打診を繰り返しました。桑原先生、斎藤先生の参加した杜甫文学研究者訪華団、蘭州氷河凍土研究所長らの訪日、近藤先生の訪中をはじめ、手渡すには至りませんでしたが鄧小平総書記に登山許可のお願いの手紙を準備したこともありました。しかし、中国側の窓口が一つでないこともあって、交渉は難航し、遅々として進みませんでした。その間にＪＡＣのチョモランマや外国隊に許可がでてしまいました。そのような折に訪中していた平井先生からの連絡で、グルラマンダータはしばらく許可がおりそうにないが、ランタン・リなら許可がとれそうなことがわかり、ランタン・リに転進することになりました。ところが、準備中にネパール側から登頂されてしま

いました。初登頂主義を崩さなかった当時のＡＡＣＫはあわててランタン・リを中止し、近くに位置し、遜色のないカンペンチン（七二八一ｍ）をあらたな候補として、中国登山協会、神戸大学などと紆余曲折の交渉のすえに、近藤先生を隊長とするＡＡＣＫの初めてのチベット遠征隊が成立しました。今では考えられないことですが、この間に数えられないほどの打ち合わせや会議がはっきりしない中国登山協会を相手におこなわれました。ＡＡＣＫも社団法人であるために行動が鈍くなることを見極め、近藤会長は理事会の権限をチベット委員会にゆだねられ、動きがスムーズになったこともありました。隊が成立後は募金が大変でした。当時の中国登山には大変なお金を必要とし、なかなか予定額に届きませんでした。予想を超える募金は近藤先生の粘り強い交渉と努力の結果で、やっと遠征隊は出発いたしました。しかし、このときの過労がもとで出発前にひかれた風邪がこじれて、ラサで高山病に罹られました。カンペンチンを見ずに、シガツエから引きかえされました。残念だったことと思います。すでにご存知と思いますが、その後、隊の登攀活動は順調にすすみ、七人が登頂し、はじめてのチベット遠征隊は成功裏に終わりました。

先生はＡＡＣＫ会長の任期中も大学の仕事は休みなく続けておられました。大学紛争はまだおさまっておりませんでした。大学の評議員を務められていた近藤教授室は何カ月にもわたって封鎖されていたこともありました。山岳部でもポーターを雇って山登りをすることに批判が出たのもその頃です。カンペンチン遠征後に工学部長を務められました。つぎつぎに起こっておりましたかずかずの紛争を一つづつ真摯に対応し、解決に当たっておられたのが印象的でした。その姿勢は私にはカンペンチンのときと同様に見えました。予期しない障害にあたったとき、関係者からよく意見を聞き、ひと呼吸おいて判断を下すタイプでした。ときにはもっと早い決定をとおもったりしました。先生の退官後になりますが、京大の組織改革がすすむなかで、よくトップダウンの運営がよいか、ボトムアップの組織がよいかを議論したことがありました。もちろん、それぞれに長所と短所はあります。種々の説が噴出し、当然のように話はエンドレスになります。しかし、いつの会議も議論は、創設期はトップダウンの方が大きく進むが、時間がたち組織が大きくなるとボトムアップが適切なことが多くなる。タイプは異なってもいずれも強いリーダシップが欠かせない。いつもこのような雰囲気で終わっていました。工学部でもＡＡＣＫでも近藤先生は後者ではなかったかと思います。またカンペンチンの報告書にも書かれていますが、チベット遠征を登攀とともに後継者の育成のためと位置付けておられ、将来のことを考えておられました。ＡＡＣＫの登山は、シシャパンマ、ブータンのマサコン、中国および同志社と合同のナムナニ（グルラマンダータ）とつづきました。停滞したＡＡＣＫが浮上するには最適のリーダだったと思います。

近藤先生は冶金学あるいは金属製錬学で世界的な業績を残されております。先にも触れましたが、私は近藤先生とは一緒の同窓会に属しますが、現在では三つの教室に分化されている関係で、先生の金属製錬学の講義を直接聞くことはありませんでした。しかし、しばしば海外での高い評価を聞いておりました。近藤先生は日本よりアメリカで有名な冶金学の先生だと東大出身のアメリカ支社長がしみじみと言われたのが印象深く残っております。もう一つ先生がお力を入れられていたのは品質管理の分野でした。比較的新しい学問分野ですが日本の草分け時代から活動をつづけられ、教授室には一九七〇年に受賞されたデミング本賞の額が掲げられていました。退官後には海外での普及活動を積極的に行われました。昨年の一〇月に長く会長をつとめられた関西モチベーション研究会によって、近藤先生顕彰会が開かれましたが、そこでは先生は自らを語ることの少なかったと参加者が話題にしておりました。最後のご著書となりました「品質とモチベーション」を見舞った病床でいただきました。そこには「適材適所」ではなくて「適所適材」を西堀先生とともに展開され、繰り返し強調されています。それを言葉だけではなく実践されました。先生はカンペンチン登頂を入院先でお知りになりました。毎日新聞の記事での先生の笑顔は、この隊を「適所適材」の理念の基に組織し、成功へと導いたご満足からではなかったかと、拝読中にあらためて感じました。

長い間、あらゆることでお世話になったと痛感しております。

ご冥福をお祈りします。

追悼 吉良龍夫氏

二〇一一年七月一九日逝去

若き日の吉良さんとＡＡＣＫ

斎藤清明

国立民族学博物館で二〇一〇年三月二七日、川喜田二郎先生を偲ぶ会を兼ねた研究フォーラム「ヒマラヤ研究と川喜田二郎」（民博主催、日ネ関西支部共催、ＡＡＣＫ後援）があり、吉良龍夫先生はゲストとして、大興安嶺探検のことなど川喜田さんの思い出を、じつに鮮明に話された。

フォーラムに出たいとおっしゃっていた梅棹忠夫先生はその三ヶ月後に逝去。その後、「ウメサオタダオ展」のために吉良さんの話を聞くことになり、私は手紙でご都合を問い合わせた。ほどなく電話があり、自宅で倒れて入院したところですと、姪御さんから知らされた。それからほぼ一年、ついに病院から帰られなかった。

二〇〇八年逝去の藤田和夫さんに続いて、川喜田、梅棹、吉良さんと、訃報が毎年続き、戦死した伴豊さんを含めて三高山岳部「白頭山の青春」仲間は、吉良さんを殿にしてみなさん鬼籍に入った。大興安嶺探検隊の学生たちも。

吉良さんは大阪市立大理学部教授や学部長、滋賀県琵琶湖研究所初代所長を務め、その名はよく知られる。世界湖沼環境委員会創設など、晩年は湖沼環境問題がもっぱらのようだが、もともとは植物生態学者。森林の生産生態学という分野を確立し、東南アジア各地で調査活動をすすめ、熱帯林研究のリーダーだった。国際生物学事業計画（ＩＢＰ）の推進など、今日の地球環境問題に欠かせない研究分野のパイオニアとして活躍。花の万博記念コスモス国際賞の第三回（一九九五年）受賞者に選ばれた。

環境問題に早くから関心をもち、学問的研究に基づいた自然保護の重要性を一九五〇年代から唱え、その先駆者であった。琵琶湖研究所に転じても世界の湖沼の環境保全に貢献をした。

このように地球的な広がりの中で研究してきた吉良さんの原点には、若き日の登山・探検行がある。学生時代の山仲間に加えて、今西錦司さんという師との出会いがあり、彼らとともに学術探検をおこなった。その活動は、ＡＡＣＫの歩みのなかでも輝いている。

大阪で生まれ、中学校までその近郊で育ち、第三高等学校に合格。山岳部に入り、そこで梅棹、川喜田、藤田さんらと出会った。それぞれ動物生態学や地理学、地質学などフィールド・ワークの学問を志し、やがて山登りだけでは飽き足らず、先輩の今西さんの門を叩いた。今西さんは十七歳年長で、理学部の無給講師。吉良さんらの専門分野の先生でもなかったが、若者たちの熱意を買った。今西さんから同志とみなされ、探検隊のいわば見習い士官に鍛えられた。

この固い団結の「ベンゼン核」グループは、まずミクロネシアのポナペ島調査で特訓を受け、続いて一九四二年の大興安嶺探検となる。この隊は今西隊長のほか、主力は学生であった。

探検から十年後に今西錦司編『大興安嶺探検』（一九五二　毎日新聞社）を刊行。「大興安嶺の同志のほとんどが、当時学生であったということは、異常な現象として、探検史上に特筆されねばならないであろう。戦争はたけなわであった。えらい学者たちが、われもわれもと軍に便乗して、右往左往している。それを嘲るかのごとく、大興安嶺の学生は、軍を乗り越え、軍のまもりの外に、自由の天地を求めていった。だからこの書は、一つの精神の記録である」、そして「吉良君には、原稿の大半を執筆してもらっている。同君の労を厚く謝したいのである」（今西さんの序文）とある。

同書は吉良さんが編集の実務をほとんど一人で引きうけ、空襲で焼かれた原稿を復活させての出版だった。もとの原稿は戦中に『大興安嶺探検誌』として校了まぎわまで進んでいたが、東京で印刷にかかる直前に空襲にあい、原稿と組版の一切が焼失してしまったのである。『大興安嶺探検』は戦後に吉良さんによって最初から改めて執筆された、たいへんな労作である。この書は吉良さんの「青春の記録」ともいえよう。

吉良さんから、探検や今西さんのことなどを度々うかがったので、いくつか記しておきたい。

ベンゼン核という風変わりな仲間が三高山岳部から生まれたのは、「相互刺激がありましたよ。誰かが勉強すると、あいつはあそこまでがんばっとる、負けるわけにはいかんと。それは非常に強かった」と吉良さんは語った。

「やはり、今西さんがそういう連中と議論の相手ができる幅を持った学問をしておられたということが大きいですね。文学部や理学部、農学部など幅広い学生たちのいろんな興味に対して、すべて対応してくれました。大興安嶺でもポナペ島でも、歩いてる間中、しょっちゅう議論でした。誰とでも今西さんは」

その議論は対等で、教師と弟子という関係ではなかったという。

「そりゃあ今西さんの方が年長ですから、先生は先生ですけど。先生にいわれたから黙るなんてことはなかった。確かに、幸運でした。そういう鍛え方をしてくれる先生にぶつかったことは。ほんとうに稀なる幸運だと思います」

論文などの執筆でも徹底的に直されたという。最初のポナペ島の報告書では全てに朱が入って書き直され、「それはもう見事な修正で、あれ残しといたら良かったと思うんですけどね」と吉良さんは懐かしんだ。あの、分厚い大興安嶺探検も？

「いや、あれは今西さんに直されてません。ほとんど私が書いたものです。あの頃には直されるということでいえば、何年も経過していて、『もう、ええわ。もう君の書いたの直さんでええ』と。それ以来、見せはしますけど、もう直されなくなった。梅棹君もそうだったといってましたね」

この頃、吉良さんは農学部助手になっていた。一人前になったと今西さんは認めたのだろう。

じつは、吉良さんは三高入学直後に結核におかされていることを知った。今日で言えば、がん宣告のようなもの。ドクター・ストップをくぐり抜けながらの山行や探検行だったという。大学卒業時には発病した。外に出られなくなり、太平洋戦争末期に中国の西北研究所にいた今西、梅棹、中尾佐助、加藤泰安さんら、ＡＡＣＫや京都探検地理学会の留守本部役をつとめた（そのころ来信の手紙類を整理して残されている）。「生態気候区分」の大胆な考えを打ち出したころは、あと十年の命と覚悟したという。でも幸いなことに、ストレプトマイシンが出現し、生きのびた。

世界の気候と植生を統一的にとらえた「生態気候区分」の提唱は、一九四五年。敗戦などものともしない、意欲的な新説だった。このとき弱冠二十五歳、京都大農学部助手であった。この論文の中で例えば、日本をヒマラヤや雲南と同じ照葉樹林帯に加えるという、新しい生物地理の区分を示した。それは、戦前戦中の学生時代、今西さんに率いられたポナペ島調査や大興安嶺探検などで得た、フィールド・ワークの成果でもあった。

やがて、今西さんが一九九二年六月に九十歳で逝った際、吉良さんが葬儀委員長を務め、弔辞を読んだ。その葬儀・告別式の日は、熱帯生態学会（吉良会長）の第二回大会が千葉で開催中だった。

また、今西錦司生誕一〇〇年記念する京都大学総合博物館での特別企画展「今西錦司の世界」（二〇〇一年一二月～翌年四月）に、吉良さんはたくさんの資料を提供された。今西さんから預かっていた、探検直後の軍部への報告書（今西錦司編『大興安嶺調査隊報告書』）も。その表紙の裏には赤鉛筆でマル秘と記していたが、「これは今西さんの筆跡です」と断定された。

吉良さんのもとにはＡＡＣＫ関係の資料が残されているはず。その遺品・資料類は滋賀県琵琶湖博物館で整理されるそうだが、学術的にも意義があるので、ぜひ公開してほしいものだ。

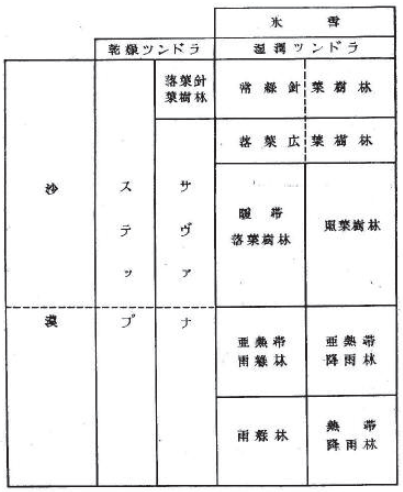
追悼　吉良竜夫先生
―森林生態系の解明―

岩坪五郎

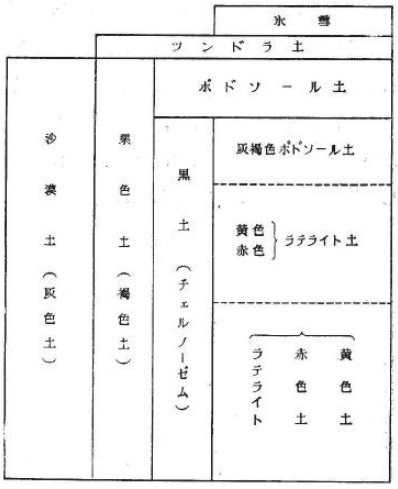
ヒマラヤに行きたければ就職するな、大学に残れ、と今西錦司さんに言われ、定年まで京大に居すわったわたしとして、一昨年亡くなられた四手井綱英先生、昨年亡くなられた吉良竜夫先生には、お礼のいいようもない。

一九五七年のスワート・ヒマラヤでの植生

調査を卒業論文にすることになり、『大興安嶺探検』報告(1)の吉良先生執筆の部分と、『砂漠と氷河の探検』(2)の北村四郎先生執筆の部分を読んでつくりあげた。わたしの論文の骨格は、チョゴリザの帰途パキスタン気象庁より借用したパキスタン各地の毎月の気温と降水量のデータを、吉良先生製作の暖かさの指数と乾湿度指数を両軸にした生態系と土壌帯の区分図(3)にあてはめ、現場の植生についての知見をくわえたものであった。指導教授の四手井先生がこの論文を北村先生に見せられたので、KUSE（Kyoto University Scientific Expedition）一九五五の八分冊の英文報告書に掲載されることになり(4)、その英訳を谷泰さん、田附ガイガーさんらにわりあてて依頼した。オーサーはオギノ、ホンダ、イワツボの順になっているが、わたしにはトップオーサーという知識がなく、リーダーが最後尾を占めるものとおもっていたのである。



世界の生態系区分（3）



世界の土壌帯区分（3）

一九五〇～六〇年代、四手井さんは北大の舘脇操さん、東大の佐藤大七郎さん、大阪市大の吉良さんらを糾合して、日本の森林生態系の総合調査を実施していた。四手井さんが東郷平八郎役、吉良さんが秋山真之役であった。ここで開発された調査方法は、以後、世界の森林調査の定番となった。四手井さんは、その功績によって、日本農学会賞、松下幸之助賞、南方熊楠賞などを受賞したけれども、推薦書はほとんどみな吉良さんの作文によるものであった。

ヒマラヤでの植生調査を専門にしていたのでは五郎が大学に居残るのはむりであろうとの四手井さんの配慮から、〝森林生態系での植物養分元素の循環について〟(5)研究することになった。当時助教授だった堤利夫先生に手とり足とりお世話になった。四手井さんや吉良さんは先生とはいうもののＡＡＣＫの内輪の人であるけれど、堤先生には面倒をかけて、まことに申し訳なくおもっている。教授からの依頼であり、断るわけにもいかなかったであろう。

この研究は京大演習林上賀茂試験地で、降水、樹幹流、林内雨、林地の地表流、渓流水に含まれる窒素、リン、カリなどをはかり、毎月の落ち葉に含まれているそれらをはかり、最後に樹木を伐採して年間増加量をはかるものであった。自転車に二リッターのポリボトルを二〇個ほど積んで、雨が降るたびに西風に向かって走るのはいささかつらかったが、またつぎのヒマラヤ初登頂のためだとわたしは観念していた。

論文のまとめに数年かかったけれど、学会で発表した時、これはわれわれがかねてから渇望していた森林生態系の機構の解明である、と吉良さんは全体の講演の中でほめてくださった。当時、その内容は世界のトップをいくものであったけれど、少し遅れて米国が同様の研究を始めた。かれらはわたしの自転車のかわりに自動車を使い、分析は専門の技術者たちによっておこなわれるのである。そこで算出されるデータは膨大で、たちまち追い抜かれ、日本の零戦や隼が、ロッキードやグラマンにやられたのと同じ運命となってしまった。四手井さんや吉良さんの各地の森林での現存量や生産量のデータは今も健在である。この調査は、樹木を葉・枝・幹・根に切り分け、重さをはかるという人力にたよる部分がおおきく、機械化、自動化のはいる部分が少なかったからであろう。

もうひとつほめてもらったことがある。私は日本各地の森林から流れ出る河川水の分析・比較をしていた。そこで、他の要因がほ

ぼ同じであれば、若い森林からの窒素濃度は低く、成熟した立派な森林からの濃度は高いことがわかった。森林は清冽な水を下流域に提供するというのは間違いだ、年寄りの屁はくさいのと同じだ、成長し続けている森林は自分の体を作るために窒素を使用するけれど、老人化した森林に土壌から窒素を吸収、固定する能力は減少するのだとした。あたらしい知見ではあるが考えてみれば当然のことだ、と吉良先生はほめてくださった。

一度だけ、感謝されたことがある。エゾマツやトドマツを主とする常緑針葉樹類の生態系ととなりのやや乾燥地帯に立地するカラマツ林生態系の土壌はこれまで一般に、ともにポドソル土壌とされてきていた。しかし私の研究室出身の松浦君はシベリヤでの土壌調査の結果、カラマツ林の土壌はポドソルではないとする学位論文を提出してきた。これぞ吉良さんの生態系と土壌帯区分図(3)に対応する知見であると二人を紹介した。吉良さんはよい人を紹介してくれたと喜んでくださった。松浦君も喜んでくれた。わたしたちは今西さんの子分の一人として吉良さんと気安くよんでいるけれども、日本の生態学界を代表する人であり、この人に褒めてもらったり感謝されたりするのは、同学の徒として光栄なことなのである。

吉良先生は奥さんを亡くされて独身・自炊生活を送りながら、海外調査などをつづけてこられたが、昨年より入院された。ものが言いにくくなってきておられると聞いて、わたしのアイデアが活かされている寺本巌さん製作の〝山口克、広瀬幸治追悼〟のDVDを、先生の看護をしている滋賀県立大学の濱端准教授に送った。最初のグーテ・カメラーデの合唱とともに出てくる知床半島冬季初縦走の京大山岳部の写真をそれは熱心にみておられました。最近なかったことですとのメールが濱端さんからとどいた。かれら三人はともに三高山岳部員である。三人の先輩たちがスキー登山をともにしていることを想像しながら、追悼の文としたい。

追伸：戸籍上は竜夫でなく、龍夫であることを吉良さんの叙勲の祝賀会で始めて知った。ご本人はずっと竜夫と書いておられた。

(1)吉良龍夫「落葉針葉樹林の生態学的位置づけ」、今西錦司（編著）『大興安嶺探検―一九四二探検隊報告』毎日新聞社（一九五二）

(2)北村四郎「アフガニスタンの植物」、木原均編『砂漠と氷河の探検』朝日新聞社（一九五六）

(3)今西錦司・吉良竜夫「生物地理」、新地理学講座四、福井英一郎編『自然地理Ⅱ』朝倉書店（一九五三）

(4)岩坪五郎「森林生態系での植物養分物質の循環」―そこでの雨水のはたす役割について―、加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編『山岳・森林・生態学―今西錦司博士古希記念論文集』中央公論社（一九七六）

(5)K. Ogino, K. Honda and G. Iwatsubo: Vegetation of the Upper Swat and the East Hindukush. The Committee of the Kyoto University Scientific Expdition to the Karakoram and Hindukush, Kyoto University（1964）

吉良龍夫先生・泰子さんと共に

日本山岳会会員・炉辺会会員
伏見紀子

もうすぐ春です。大津に住んで三十年を迎えます。吉良夫妻におめにかかったのは、一九八二年春でした。夫、伏見碩二が名大の水圏科学研究所から滋賀県琵琶湖研究所に勤務が変ってのことでした。引越の日に泰子さんが出迎えて下さり、お世話になりました。

四月に雪と満開の桜の花が眺められる年でした。少し落ち着いてから吉良先生のお宅へ、ご挨拶に伺いました。泰子さんは東京出身なので、話す言葉が少々、怖いと感じる方が多かったようですが、私も東京でしたから、その点はうまが合いました。吉良先生はとてもやさしく、子供達も「吉良おじさん」、「吉良おばちゃん」となついてゆきました。

吉良先生が大津に家を建てることになり、泰子さんと毎日、あちこち見て廻り現在の、南郷に新築されました。庭にはエゴノキを植え、早春に咲く、ショウジョウバカマ、イチリン草、オキナグサなど可愛らしい山・野草を育て小さな温室や東洋蘭の棚が作られました。

休日には庭仕事をとても楽しんでいた姿が思い出されます。

吉良先生のお宅と我家は瀬田川の右岸と左

岸で約五キロのところでした。瀬田川は朝早くから各大学のボート部のエイトやカヤックの練習の声がします。川畔の柳の大木が新緑に映え、秋にはハゼの紅葉の美しいところです。

先生のお宅は、お二人暮しで、到来品があると、食べ切れないので助けてと、泰子さんからお電話が有りました。山海の珍味をよく頂きに行きました。

私は実家が遠いので子供の誕生日にはお赤飯をお届けし、子等の成長を毎年祝っていただきました。

一九八四年、第一回世界湖沼会議が大津で開催されました。大盛会でした。二年に一度開催されることになり、先生夫妻はブラジル、インド、中国、アフリカ、ヨーロッパ等への海外出張が続きました。そうした時はお宅の庭に水やりに通いました。

吉良先生の米寿を祝う会の翌日
（於：自宅玄関、2007.12.28）

一九九〇年、吉良先生勲二等の叙勲の祝賀会が大津プリンスホテルで催され、多数の来賓で、ご夫妻がとてもはれやかに、輝いていました。その後コスモス国際賞、南方熊楠賞、日本学士院エジンバラ公賞と、栄誉が続きました。

大津での生活も順調に過して来ましたが、吉良先生は成人病センターへの入院。泰子さんの市民病院への入退院と心配が重なりました。

私もアルバイトや子供達のことで、泰子さんのお相手する時間が少なくなりました。その頃だったでしょうか、泰子さんが髪を青色に染めていたので、私は内心びっくりしましたが、「龍夫さんが気がついてくれない」と寂しそうにつぶやいた日がありました。顔の表情も元気がなくなったような気がしました。歩行も注意深くなり、ヒールの高い靴は全部処分すると言いました。銀座ヨシノヤの靴だけは、もったいないので、私が頂きました。やがて病状が進み市立病院の介護施設に入院しました。犬の縫いぐるみや赤ちゃん人形をペットに用意しました。また、女学校時代の歌曲を拡大コピーして二人で声を出して歌いました。少しでも良くなるのならと努力してみました。先生は夕食の介護によく訪れておりました。ご自宅まで車で送れるように、時間を合せて、お見舞いに行きました。私は外から出来ることをお手伝いをし、季節の衣類の交換などは、大阪から依田章子さんが来てお手伝いをしていました。入院中の衣類の洗濯や自宅のお掃除、買物はヘルパーさんにお願いしていました。それ以前の先生は電気自転車を買って買物をして、お料理もしていました。

九三年と〇三年には、マレーシアの熱帯雨林を再訪しています。モンゴルの調査にも、数回出かけられました。花の季節に行けた時はとても喜んでいました。

泰子さんの病気がどんどん進み、記憶が遠くなってゆきました。ようやく特別養護老人ホーム、千寿の郷（さと）に入所出来ました。ご自宅からバスで通えるところでした。元気になれるのを願って、泰子さんは胃瘻の手術をしましたのでこれからは栄養はチューブで、果物や和菓子は口から食べさせてあげられると、思っていました。でも病室の入口に食品の持込禁止の貼紙をされてしまいました。これには吉良先生と私はがっかりして悲しくなりました。

吉良先生の背中もずいぶんと丸くなりました。先生は毎週一回、草津の国際湖沼環境委員会（ＩＬＥＣ）へ仕事に行き、湖岸からの比良の山々を眺めるのが楽しかったことでしょう。時折りその途中車で立寄って明るい笑顔をみせて下さいました。

私にとって、二十八年間にわたる、ご近所付合で一番大切な晩年に「失われた二年間」があります。県立大学を停年になった夫が、ＪＩＣＡのシニアボランティアに応募してネ

パールのポカラに在る国際山岳博物館の学芸員として〇八年六月から一〇年六月まで日本を留守にしたことです。とても心残りでした。

吉良先生お一人で泰子さんの介護と、著作集の準備。出版社から京大の院生の方が助手に来て下さり喜んでいました。毎日だと準備に追われ疲れるので、訪ねて来れる日を少なくした、とおっしゃっていました。

泰子さんの逝去を遥か遠いヒマラヤの地で娘からの電話で知りました。

吉良先生は本の準備で生き生きと頑張っていることと思っていましたが、市民病院に入院したとのことで家族三人でお見舞いに伺いました。それから約一年、時々お見舞いにいっていました。ネパールのキバナシュクシャ（注：ネパール原産の黄花ジンジャー）の香り高い花や先生のお誕生日の頃には実付のヤドリギの小枝を持って行きました。

七月十九日、吉良先生がお亡くなりになったとお知らせを頂き、お宅に戻られた吉良先生にお別れに行きました。東京から来られた澤近十九一さんが「吉良竜夫著作集Ⅰ　日本の森林と文化」を病室に届けた日、吉良先生は本の方をみてうなずいたと話して下さいました。それを伺って、とてもうれしかったです。「著作集第Ⅲ巻　生態学への招待」も大津プリンスホテルでの、吉良竜夫さんを偲ぶ会（一月二〇日）には出版されました。

長い長い泰子さんの看病とご自身のライフワークを終えられて、泰子さんの元へ旅立つことが出来て、ほんとうによかったと思います。

吉良先生、泰子さん、あの小さかった娘、雪子も出産して元気な男の子がすくすくと育っています。お見せ出来なくて残念です。

吉良先生ありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

追悼　松本徑夫氏

二〇一一年三月三〇日逝去

松本徑夫先生を偲んで

倉智清司

松本徑夫先生と最初に出会ったのは昭和四十三年であった。高校卒業後八幡製鐵（現在の新日鐵）に入社し本格的に登山を始めようとしていた時、同じ寮の隣室におられ、先生同様に私が師と仰ぐ太田五雄氏（当時先生が所属していたしんつくし山岳会員で現在は屋久島山岳研究の第一人者）に紹介された。先生は当時長崎大学に在職されており、翌年に計画されていた福岡県山岳連盟主催のヒンズークシュ山脈ティリチ・ミール峰登山隊の学術隊員として頻繁に福岡の隊員会議に来福されていた時だった。

山を本格的に始めたばかりの私は、松本先生や太田氏が所属していたしんつくし山岳会に入会した。まずは九州の山からはじめ岩登り、北アルプス、冬山登山へと考えていた。九重山を中心に故立石敏雄氏や船津武士氏の指導を受けながら、また、岩登りや冬山は太田氏に指導を受けていた。その中での先生との出会いで、九州の山で育てられながら、中央アジアやヒマラヤへの夢を植えつけていただき、それまでの単なる登山や岩壁登攀の思考から、夢のまた夢であったヒマラヤを強く意識することとなっていった。

松本先生は来福して登山隊隊員会議が終わると度々山岳会の連中と飲み会を催された。先生には福岡の山仲間が『蛇麻呂』（昭和四年生まれの巳年で大の酒好きであった。）とあだ名を付ける位の恐れる酒豪でもあった。ひとしきりヒマラヤや中央アジアを語り、「バカ者」と怒鳴られ、「本を読め」「山に行け」「ヒマラヤを目指せ」と発破を掛けられながら、酒を酌み交わした。当時は、博多と長崎間の交通手段は当時の国鉄の鈍行夜行列車の利用が主流であった。夜行列車の時間が近づき博多駅のホームまでお送りすると、「明日の講義は午後なので朝一番で帰れば大丈夫と」結局二次会が朝まで続くこともあった。また、酒を飲み夢を語り出したら必ずと言っていいほど得意の「血湧き肉踊る」を連発、最後は三高寮歌の「千載秋の　水清く　銀漢空に　冴ゆるとき　通える夢は　崑崙の　高嶺の彼方　ゴビの原」を子供のような純粋な顔で歌っていたその姿が今でもありありと浮かんでくる。先生とお酒は切っても切れないものであった。お酒が入るとロマンが限りなく泉のように湧き出てきて、登山のみに限らず、探検学、民俗学、文化人類学等々にまで及びしばしば徹夜で語り明かすこともあった。専

門は地質学という堅い学問を専攻されているのが信じられないような、その話の内容の幅の広さにいつも感心させられていた。

その後、私の人生にとって松本先生との出会いは大きな影響を受けることとなった。九州の山々を歩き、岩登りのトレーニングに通っている内に、非常に保守的であった八幡製鐵にいても休暇がなかなか取れず、北アルプスは勿論、先生と出会いお付き合いをさせていただきながら育んできた海外やヒマラヤの夢など到底実現できないと、会社を辞め九重山や屋久島の岩壁や谷に精力的に通いはじめ、夢に向かって走り出した。その後、今の会社に入社し、台湾新高山・次高山や韓国雪岳山、ネパールのランタンヒマールと毎年のように海外の山に出かけたことも、先生からの叱咤激励や人をうまくその気にさせるような話術に扇動された結果と言っても過言ではない。さらには、「もっとヒマラヤを勉強するためには、日本山岳会に入会すべきだ。」と深田久弥先生のご自宅に同行させられ、お二人がヒマラヤや中央アジアを夜通し語られているところに同席させていただいた。そしてお二人に入会紹介者になっていただき、昭和四十六年三月入会した。深田先生は同年三月二十一日茅ケ岳山頂直下で急逝され、私が日本山岳会の最後の紹介者となった。

日中合同梅里雪山登山隊遭難慰霊碑前
（平成十一年十月中国雲南省徳欽県飛来寺）

昭和五十七年二月松本先生にとってもっとも悲しい出来事が起こった。京都大学探検部に在籍していた長男岳士君の大山での遭難死である。先生が第十六次南極観測越冬隊から帰国後、彼は京大に入学していた。先生にとって「南極で長く家を空けていた。岳士君が入学し、成人したお祝いに」と太田五雄氏と四人で昭和五十二年の正月休みを利用して韓国智異山に行った。その頃彼は探検部にも山岳部にも所属せず、単独行による山行きをしており、太田氏と私は彼からどのような山行を目指すべきか相談されていた。岳士君との山行はこの一度だけであったが、それだけに思い出は鮮明に浮かび上がってくる。その後、探検部に入部、段々と激しい山行をしながら、中国の未踏の地に夢を馳せ、海外遠征にむけての訓練のための大山での登山活動中であった。この遭難事故が引き金となって、彼の通夜、葬儀には多くの山仲間や京大探検部の有志らが集まり、彼の意志を受け継ごうと、その後「青蔵高原登山研究会」が組織され、昭和六十年に京大探検部との合同の揚子江源流唐古拉山脈学術登山隊が実現することとなった。松本先生が隊長を務められ主峰各拉丹冬（ぐらたんどん）雪山（六六二一m）の初登頂に成功、目標の残り二峰の未踏峰登頂は断念したものの、揚子江の正源域に分け入り学術調査活動をおこない大きな成果を挙げた。期間中限られた日数や悪天候、さまざまな悪条件の中で、先生の妥協を許さない、純粋な気持を隊員にぶつけ、激しい執念でリーダーシップを発揮され諸問題を解決しこの隊を成功に導かれた。

その後、先生に大きな影響を受けた私は唐古拉山脈学術登山隊に参加した探検部ＯＢの松原英夫氏や故広瀬顕君達と次なる未踏峰を目指すことになり、昭和六十三年の梅里雪山の偵察隊、翌年の第一次本隊に参加することとなった。

一方、先生はますます青蔵高原やシルクロードに頻繁に出かけられるようになった。中国科学院との横断山脈東南縁部地質調査、九州大学可可西里山脈学術探検隊、長白山、岷山、崑崙、天山、アルタイ、玉龍雪山、崗日嘎布山群など中国青蔵高原への渡航は四十回以上に及んだであろう。そしてその踏査行については必ず記録を残し多くの著書として出版されている。いつもながらそのバイタリティーには驚くばかりで、私には到底足元にも及ばなかった。先生が青蔵高原にもっとも傾注されたのが、最後の地図の空白部といわ

れた東チベットの崗日嘎布山群の踏査ではなかったのではないかと思っている。その集大成として『ヒマラヤの東　崗日嘎布山群―踏査と探検史』（共著、平成十九年、八百十八頁）は平成十三年から十七年にかけ毎年五度に及ぶ踏査隊隊長を務め、聞き取り調査による新山名を明確にし、位置を同定した探検的踏査を上梓し、平成十九年日本山岳会第九回秩父宮記念山岳賞を受賞された。出版前、この山群の山座同定が完成すると、手書きの地図を大切そうに持って私の会社にこられ「これを是非製図してもらえないだろうか」と、その時の何かを成し遂げた満足そうな、嬉しそうな顔が今でも思い出される。勿論喜んで仕事は後回しにして地図の製図を仕上げた。また、秩父宮記念山岳賞受賞祝賀会では司会もさせていただき、大変喜んでいただいた。

最近は、九州大学の学生時代に九重の山小屋番をされていた時にセンチメンタルなことばを好んで歌詞に使った「坊がつる賛歌」を作詞し、情熱を傾けていた九重通いが多くなられていた。九重坊がつるのあせび小屋で何度か酒を酌み交わしながら、「倉智君、九重からはじまり、アルプスやヒマラヤを目指すことは大いに結構である。そして最終的にはここ九重に戻ってくるような山登りをしなさい。」と教えられたことが思い出される。先生は最近口癖のように周囲の人に話されていたようで、「俺が今日在るのは九重と飯田高原の人々のお陰だ。九重と飯田高原の人達が俺を育んでくれた。」「これからの余生は自分を育ててくれた九重に恩返しをするのだ。」とおっしゃていたそうである。倒れられた昨年三月十八日も六月に控えた「九重の自然を守る会設立五十周年記念式典」に合わせて出版する「九重の花暦」の著述を脱稿し、共著者と一緒に好きなお酒を飲まれ、帰宅後倒れられた。突然の知らせを受け入院先へ駆けつけ、何とか意識を回復されんことを祈り続けたが、意識が戻ることなく三月三十日亡くなられた。

九州の山仲間からは、「松本先生を喪い、福岡九州の山岳界はもとより、日本の山岳界にとって大きな損失である。」との声を多く聞く。また、先生は学術的、探検的な多くの貴重な文献や蔵書を残された。その功績を無にせぬよう九州大学図書館に一部が「松本文庫」として、また、長野県大町市の市立大町山岳博物館に長野県山岳協会創立五十周年記念事業として新たに建設される「山岳図書資料館」に同協会名誉会長の古原和美氏のご協力をいただき、大半の文献、蔵書が寄贈されることになったことは大変喜ばしいことである。

二月には、ご遺族によってご長男岳士君が分骨されている西本願寺に一緒に分骨され、岳士君に中国の山行報告をされ、お二人で中央アジアを熱く語り合っているのではないだろか。また、来る四月八日には、こよなく愛した九重法華院観音堂の五輪の塔に多くの山仲間の出席により納骨の儀を執りおこなうことになった。すでにこの塔に入っておられる九州の登山の先駆者である故加藤数功氏や故立石敏雄氏らに「九重にはじまり私も九重に帰ってきました。」と報告されるであろう。

松本徑夫先生は生前すでに自分の法名を用意されていたそうである。院号・法名は『探峯院釋徑道』である。これは、先生の長崎大学時代の教授仲間で東大の印度哲学を卒業後、長崎大学で教授をされ、自家の寺の住職でもあった、正木晴彦氏（真宗大谷派肥前長崎向陽山光永寺第十六世住職）に平成十年にご自身が頼んで付けてもらったそうである。通夜の時奥様からその由来を見せてもらい、正に先生にぴったりの法名であると感心させられたので紹介をしたい。

正木住職の手書きの由来解説によると、「探」は、穴の中で手で火をかざし照らし、神秘を探る（探幽）。「峯」は、山＋上＋木＝自然の神木のある山の頂上。①神霊の憑る木→普通の山と違い、天上に通じる様な霊山の頂上。②学問や技術の最高水準。最先端との意味がある。

すなわち『探峯院』とは、世界の最高峰や極地に到達した男の意味なれど、同時に学問、技術の最高峰（文武）を極め、以て余の為人の為に多大なる貢献をせる功徳に依りてこの院号を授与する。とある。

「徑」は、徑は征の本字で、もとは（正しく走る）又は正＋行＝正しく行く。松本師の場合は「正」が二つも付いている。→頑固に踏まえた処あるが故に枉れるを許さず。→①行く、正しく行く。②天命に依り道に外れる者を懲らしめ正す（征伐）。「道」は、単なる道路やプロセスに非ず、未知なる神秘なる、永遠なるものを目指してこの絶えざる努力と情熱を意味する。

すなわち『釋徭道』とは、単なる無謀な冒険屋に非ず、かといって机上の空理空論のみを振りかざす青白きインテリにも非ず、文武両道に秀でた二十一世紀の大学人の理想たるを表現す。言う迄もなく「道」の中味は山岳、高山植物、環境等のみならず学問的真理をも格す。と解説されている。

これまでの四十三年間にわたる先生のお教えに感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

追悼 菊池卓郎氏

二〇一一年四月二六日逝去

菊池卓郎君
―らしくない新人―

寺本　巖

菊池卓郎君は、昭和二五年京大山岳部に大量入部した私たち新制大学二期生の一人である。新入部員募集のポスターにつられて、ドアをたたいた部室に入ったとき先客がいた。上級生かと思ったが、入部したての菊池ですと自己紹介してくれた。そして「どんな山に登っていますか？」と聞かれたことを覚えている。私には、高校時代に白馬岳から祖母谷温泉への縦走くらいしかいわゆる山歴がなかったのが恥ずかしかった。菊池君は、高校山岳部で北山や比良などでずいぶん山には経験がありそうだった。

入部後最初の夏山合宿は剣岳の真砂沢だった。登山口の藤橋から重い荷物を背負っての丸二日間の炎天下ボッカは、私たち新人にとっては特につらいものだった。確か二日目だったと思うが、弥陀ヶ原を顎を出しながらもゆっくりと歩いているとき下山してくる若い女性パーティとすれ違った。挨拶の声を掛け合っている中で、突然足を滑らせて重いキスリングもろとも大転倒した仲間がいた。菊池君である。川で衣を洗う若い女の脛を見て神通力を失い雲の上から墜落した「久米の仙人」に因んで、「クメロー」とあだ名がつけられた。私の記憶に間違いがなければ、名付け親は中島ダンナだったと思う。以来、だれも彼を「タクロウ」とは呼ばなくなったくらいぴったりの命名だった。どちらかといえば物静かで目立たない新人が、一挙に存在感を強調した一瞬だった。

真砂沢での岩登り合宿の後、数人のパーティに分かれてあちこちの縦走に出かけるのが合宿第二部だった。私は、吉村クモスケさんがリーダーの「後立山縦走パーティ」に加わった。立山連山を南下し五色ヶ原を経て今は湖底に沈んでしまった平小屋の前で黒部川を渡り、対面の針の木岳へ登る。そして白馬岳まで後立山連峰を北へ縦走する一週間の行程である。メンバーには、菊池クメロー、松田カメ、泉ポテシャン、池内がいた。リーダーのクモスケさん以外は全員が新人の一年生同期生であった。その中で最も頑強そうな松田カメが自然とサブリーダー的な存在となった。この縦走中、クメローは終始下痢に悩まされていたようであった。しかし決して弱音を吐かなかった。いかにも山慣れしている彼らしいところだ。写真1は、その後立山縦走中のどこかの山頂（五竜岳？）での休憩を寺本が撮ったものである。一人だけ視線の方向が違うのがいかにもクメローらしい。池内の地下足袋や、ポテシャンのゲートルが懐かしい。

聞けば、菊池家は代々園芸畑の学者家系で、クメローのお祖父さんは「青森りんごの始祖」と呼ばれており、お父さんは京大園芸学教室の初代の教授で「梨の神様」と呼ばれた方だとか。クメロー自身もそのＤＮＡを引き継いで、一九六〇年弘前大学農学部に講師として着任し、七四年に教授となり、九三年から九七年まで農学部長を務めた。専門外のことでよくわからないが、なんでもリンゴの剪定に関する研究の第一人者ということである。

その毛並みの良さに加えて、ほとんどが登山未経験の同期生新人の中で、最も山の経験がありスキーも上手だった。未成年のくせに酒も強かった。しかし浮かれたところのない地味な、それでいて秘めた底力を感じさせる山男であった。言葉は悪いが、「ボロ着がよく似合う野武士」というのが私の印象である。

追悼文執筆を依頼されて古い写真を探していたら、あの昭和二五年の剣岳真砂沢夏山大合宿の集合写真が出てきた。少し首をかしげた一年生部員クメローの姿も見える。六〇年以上も前の写真で、鬼籍に入られた人も多いが、クメローなどわれわれ一年生が最年少だから、今や全員八〇歳以上になっていることになる。平井ポコの協力を得て全員二九名の

名前を同定できたので、クメロー追悼文の紙面をお借りして紹介する（写真2）。供養にとは言わないが、懐古趣味をくすぐるいい場だろうと思うからである。

山岳部時代、クメローとは猫又谷遡行など何回か山行をともにしたが、最初の後立山縦走のほかは極めて記憶に薄い。そのパーティのリーダー吉村クモスケさんは、早く一九九〇年に亡くなった。二〇〇五年に松田カメが亡くなったとき、平井ポコに誘われて、菊池クメロー、泉ポテシャンと山岳部同期生四人で奈良のお宅に線香をあげにお参りした。久しぶりにクメローと会ったのだが、それが最後になってしまった。ご冥福を祈る。

写真１：後立山縦走（昭和 25 年７～８月）
前列左より池内、松田（敏）、泉。後列左より菊池、吉村。

写真２：剣岳真砂沢夏山合宿（昭和 25 年７月）

菊池卓郎君追悼

井上トッキュウ

菊池クメローは一九五〇年山岳部入部、あだ名は粂仙人である。彼の風采や登山スタイルはひょうひょうとして群れず、自然を独りで楽しむ所があった。入部して間もなく彼と雨の比良山へ入り、顔や全身煤だらけ、びしょ濡れになって藪こぎをした登山のことや、厳冬や早春の頃、鴨川の橋の上から真っ白になった北山や比良山を見ると、翌日は彼と二人で尾根歩きのラッセルに出かけたことを思い出す。彼は道のないところを歩くのが好きだった。戦後のまだ荒れ果てていた大峰・熊野連山を、残雪の吉野から熊野那智山へ、独りで行者のごとく野宿の奥駆けをしたりしている。

彼は大学院卒業後、しばらく愛媛大学でミカン栽培の研究をし、そのあとは東北の弘前大学農学部に移りリンゴ栽培の研究に没頭していた。岩木山の春山スキー登山の帰りに弘前へ寄り彼と話したこともあったが、その後彼とほとんど会う機会はなかった。久しぶりに会ったのは一九九七年一一月、山岳部同期の島田ブイやんの京都での告別式のときである。クメローはその年の三月に弘前大学を退官したが、ライフワークのリンゴ栽培の研究でやり残した仕事があるので、自分は独り弘前に下宿して残り、これまでの研究の総まとめをするとポツリポツリと話してくれた。

クメローから「農耕の技術と文化」という論文と、彼の著書「農学の野外科学的方法」が送られてきたのは二〇〇二年である。私にも野外科学的工学技術の観点からの意見を求められた。彼がこだわり続けたリンゴ園の栽培技術研究のフィールドワークが、どのような経過をたどり、どのように実践されたかが書かれていて、「農学の野外科学的方法論」を開拓しようとした彼の努力に、門外漢の私にも共感すること多々であった。やはりクメローは自分のライフワーク研究でも人の通らない道を独りで切り開きながら進めたのだと、山岳部での彼の登山スタイルと重なり合うものを感じた。

彼は著書の中で、「役に立つ」研究とはなにかと考えたとき、自分のやったことは先輩川喜田二郎さんの提唱した野外科学の考え方に基く「農学版」だと言い、〝これが農学の野外科学的研究の唯一の形態だと考えているわけではないが、農学分野の多くの人びとに取り上げられ、さまざまな形で発展することを願っている。野外科学的研究は、日本で育てて世界に向かって広げていくべきだと考えている〟と述べている。彼自身も海外での研究発表に熱心であった。

京都に帰ってからは北山で独り歩きの山行を楽しんでいると話していたが、その後体調を崩して病床にあると聞き、続いて彼の訃報が届いた。山岳部で共に過ごした仲間が一人ひとり他界していくのはさびしい。天上で、先客の島田ブイやん、松田カメさん、廣瀬エトさんら山仲間と再会し、得意のヨーデルを歌っている菊池クメローの姿を想像し、冥福をお祈りする。

合掌

追悼 人見五郎氏

二〇一一年九月二四日逝去

マサ・コン峰初登頂と人見君

横山宏太郎

人見五郎＝ハイガ君が亡くなった報せに、信じられない気持ちだった。一九八五年一〇月一三日、私にとって人生最高の日をともにしたハイガ君。病気のことは、しばらく前に彼から電子メールで伝えられていたが、そんなに差し迫ったことではないと言っていたのに。あれは、私を心配させないようにという、彼の気配りだったのか。

山岳部では、入部が一〇年違うので、山行を共にしたことはなかった。しかしいろいろに私たちの軌跡は交錯する。一九八〇年暮れ、豪雪の剣岳・赤谷尾根で彼は二人の友人を失った。ちょうどネパールから帰国した私は、救援隊長として馬場島に急いだが、降り続く雪になすすべはなかった。一九八一年秋、チベット偵察（ランタン・リ、カンペンチン）に向かったが、一九八二年春から武庫川女子大学の教員になる私は、本隊に参加できない。

マサ・コン峰の頂稜を進む人見五郎君

彼はカンペンチン隊に参加し、初登頂を果たした。当分ヒマラヤはあきらめ、と思っていた私に、ブータン遠征計画を進めていたハイガ君たち若手から誘いがあった。うれしかった私は、多少無理しても参加したいと思い、そこに加わった。それが彼とのほんとうのつきあいの始まりだった。

「偉大なる獅子マサ・コン峰登頂（堀了平、一九八六、講談社）」では、彼は以下のように紹介されている。「隊の事務局長は人見五郎が務めている。彼は京大大学院の農学研究科農林経済学博士課程の学生である。一九八二年のカンペンチン遠征隊にも隊員として参加、初登頂を果たしている。また、このブータン遠征の前年に行われた偵察隊のリーダーを務め、学生ながらもブータン側と対等に交渉を進め、マサ・コンの許可をとっている。語学力もさることながら、隊の重要な仕事をさも楽々と、テキパキとこなしていく二九歳の好青年である。」しばし彼の活躍と笑顔を思い出すことにしよう。

一九八四年、ハイガ君は偵察隊長として、目的の山、ガンカープンスムに向かった。一一月、隊長の堀先生とともに私はティンプーを訪れた。偵察から帰ったハイガ君たちによれば、容易なルートがありそうな北側に回り込むのは国境問題が絡むので難しい、南側は急傾斜でルートが限られる、したがって他の隊と同時の登山（ブータン政府は他の隊にも登山許可を与えていた）となれば危険を伴うだろう。その結果、我々としては、ガンカープンスムに固執するよりも第二希望としていたマサ・コンに転身する方が有利という結論になった。前者は国境稜線上と思われるのに対し、マサ・コンは完全にブータン国内にあることも考慮しての判断であった。通信観光省のサンゲ・ペンジョール大臣にお目にかかり、この希望を伝え、首尾よく許可をいただくことができた。

そのようなわけで、我々にとってマサ・コンはほとんど未知の山だった。そこで先発隊がルートの偵察をして本隊を迎えることになった。カルカッタ(コルカタ)で人見、月原、菅野と私は合流し、ブータンに入った。ティンプーからのキャラバンは順調に進み、氷河が見えるところまで来た。しかし九月初め、まだモンスーンは明けず、山は雲に包まれて頂上がどこにあるのか見えない。登路とする氷河はどこか。頼りは、上田豊さんがおしえてくれた、トマ・ラからのガンサーの写真だけである。あたりに見える岩峰や氷河を写真と繰り返し照らし合わせたが、どうもすっきりしない。写真から想像していた地形とはなにか違う。そんなとき、見方を変えて、写真の大胆な解釈を言い出したのはハイガ君だった。なるほど。それでもまだ謎は残る。翌日は幸いに晴れ、高みに登った彼によって、謎は解けた。我々が登路にしようと考えていた「氷河」は、実際には、大きな氷河の分流と、尾根を隔てて手前に広がる雪面とが、つながっているように見えていたのであった。これで、六〇〇〇mあたりまではめどが立ち、隊にとっては大きな前進だった。

本格的な登攀にかかると、難しいルートが続いた。一〇月初め、第一の核心部というべきところで、立ちはだかる氷壁はたいへん難しく、事務局長として隊の中心になってこの計画を進めてきた彼だが、登山成功に疑問をもった。いよいよ撤退となったときに再起に向けて資金は足るか、とまでも考えたそうである。そこは若手の活躍で乗り切ったが、彼の心には、弱気になったことへの負い目が残ったようだ。しかし、その次の、第二の核心部、上部の氷壁は、彼をリーダーとした四人のチームの活躍で突破できた。それで、彼の心にあったわだかまりのようなものは薄れていったのだろう。

上部氷壁を越え、東峰の基部の雪原に最終キャンプを作った。第一次アタックは、人見・中山・月原と私。頂上に近づいたところか

ら、年齢順で私がトップに立った。ハイガ君は、最後尾からビデオ撮影をする。最後は純白の雪の稜線が形作る三つの小さいピーク、一番奥が一番高い。あそこまでだ。ザイルで確保されながら慎重に進む。雪稜、ほんとうのエッジの上に足を置く。右も左も二〇〇〇m以上すっぱり切れ落ち、特に左すぐ下には歩いてきた谷筋が見えるが、雪はしっかりしており、恐怖感はない。これほど気持ちのいい登山はほかにあるだろうか。最高点の左側は少しだけ傾斜が緩い。ちょうどそこに着いたとき、「ザイルいっぱい」と声がかかった、手を挙げて合図をし、ピッケルを雪面に刺し、スノーバーで支点を作ってザイルを固定した。三人が順にやってくる。ハイガ君は片手にピッケル、片手に三脚につけたままのビデオカメラをもって歩いてきた。四人がそろった。一九八五年一〇月一三日、念願のマサ・コン峰の初登頂。私にとっては人生最高の日、彼にとっても満足できる結果だったに違いない。

この間に気づいたことがある。本隊派遣に向けての計画検討と準備にはじまり、ブータンに入り、登山、そして帰国まで、楽しいことばかりではなく、面倒なことやしんどいこと、様々なことがあったが、その毎日を明るく楽しいものにしてくれたのはハイガ君だった。ブータンの人たちと仲良くなるのも、彼のおかげで早かった。それは、登山の成功につながる、大きな力だった。私に欠けているところを彼がうまく補ってくれたわけで、感謝している。

一九八八年からの梅里雪山では、残念ながら思うようにことは運ばなかった。偵察と一次隊失敗の責任は私にあり、二次隊の遭難を経て再起を図った三次隊では、登攀隊長を務めたハイガ君をつらい立場に立たせてしまった。申し訳ないことだった。

二〇〇五年一二月、私たちマサ・コン隊は、二〇周年を記念して、ブータンを再訪することにした。当時の隊員とその家族、また山岳部の先輩も加わり、栗田ラーメンさんと月原ベコ君が添乗員役で、ブータン側の協力も万全、ブータンの友人たちやマサ・コンとの再会も果たし、これ以上ない楽しい旅だった。ハイガ君ももちろん参加した。バスのなかでも、食事やパーティーでも、相変わらず彼のまわりは明るい雰囲気に包まれるのだった。

ブータン入りを控え、私は妻とともに集合地のバンコクに一日早く着いた。妻の体調が心配だったので、一日休んでおくつもりだった。前日から来ていたハイガ君は、いろいろ世話を焼いてくれた。タクシーを一日雇っての市内観光に誘われ、妻もなんとか行けそうだというので、彼の好意に甘え、有名なエメラルド寺院やボート観光、水上レストランの食事を楽しんだ。妻も元気になり、特に食事はすっかり気に入って、日本でも時々タイ料理を食べている。ブータンでも元気に過ごし、タクツァン僧院は手前の尾根から眺めることにしたが、それ以外は心配することもなく、私は旅を楽しむことができた。これも全く彼のおかげであり、感謝している。

これまで、誰一人欠けることなく、皆そろっているのが自慢だったマサ・コン隊。ときどき、京都や笹ヶ峰で、マサ・コン会と称して、集まった。彼も遠くから参加して、いつも通り座を明るくしてくれた。昨年の一〇月一三日は、彼とともに頂上に立ったあの時を思い出しながら、杯を彼のために献じた。次のマサ・コン会は、残念ながら、少し寂しいものになるだろう。

人見五郎

牛田一成

三〇年以上も経過すると、彼はどのくらい離れた学年だったのか全く定かではなくなっている。彼は、こちらが五回生くらいの時の新人だっただろうか。五回生くらいになると、好きな山登りしかやらなくなっているので、たとえば黒部別山南東壁だったり丸山東壁だったり、五月の連休の別山第一尾根や八ッ峰Ⅰ峰四稜だったりと、こっちは黒部別山周辺の登攀ばかりしていたのだった。何人か一緒に行く下級生はいたものの七〇年代後半の京大山岳部としては特殊な系統だったに違いない。そのせいか、かなり下の学年だった人見五郎と国内山行を共にした記憶がない。一方で、彼は農学部だったし学科も同じだったうえに、種々のいきさつで東一条の地塩寮にも入寮してきたので、もっと特殊な系統の登攀を共にした記憶はある（今頃は、こうした文章の後にwと書くのだが）。なので、いきなりヒマラヤに話がとぶ。

あれは、カンペンチンのC2で六二〇〇m辺りだっただろうか。四人用のウィンパー型テントに彼と二人で泊まっていた。森本グロン登攀隊長の指示は、翌日、七〇〇〇mこえるとこまでルートを付けろという指示だった。「天気が良うて登れそうでも登頂すンなよ」という付け足しもあった。カンペンチンのルートはチベット側にあり、そこは当然北側になるので四人用テントに二人では、ずいぶんと寒かった記憶がある。早朝目を覚まして飯を作り始めるのだが、当時のガスはパワーがなくて余りの寒さで身動きができない。日が当たるまでしばらく待っていたらずいぶんと出るのが遅くなってしまい、後から叱られた記憶がある。ぼくがぐずぐずしていたので人見は怒られ損だったと思う。

テントを出てからは、クレバスを避けながら傾斜の緩い雪面を登ったのだが、ぼんやり登っているとときおり片足が膝上までもぐってしまう。おお、クレバスかと思い、クレバスを避けながら登るつもりで右に行ったり左に行ったりと結構ジグザグしてしまう。かけている時間の割には高度があがらず、ようやく七〇〇〇mにある大きなクレバスまでたどり着いて戻ってきたら、松林ドクターから、こんな体たらくは七〇〇〇mという高度に対する恐怖心であるとまたしても小言を頂戴した。こんな平易なところは、頂上に向かって真っすぐトレースを付けろということである。これも僕の責任で、彼は怒られ損だったろうなあ。

翌々日だったか一旦C1に降りてから、再度C2にあがり、頂上直下の雪壁に取りついた。クレバスの下の段をたどって斜上し、割れ目の上の雪面にピッケルとバイルを叩き込んだ。雪面がクレバスで切れているので、頭の辺りが五〇cmくらいのハングになっている。エイヤっとハング気味の雪をのりこし、もう一手ピッケルを右上に叩き込んだら、いきなり取りついた雪が大きく割れて、その雪塊もろとも一〇mほど墜ちてしまった。そのとき、止めてくれたのは彼だった。いきなりリードが墜ちてきたので肝を冷やしたかもしれないが、クレバスの縁に座りこんでビレイをしている彼は、ひどく冷静だった。

彼は、冷静な男であるとともに周囲の状況とくに他人の行動をよく観察し、そして先を読むことが上手だった。カンペンチンに向かう途上の北京の街角で、どうしたわけか小さな子供に対して無意識にレンズを向けがちだったのだが、「ずっと子供ばっかり撮ってますね、赤ちゃん産まれたからですか？」と本人が意識していない心理を指摘したのも彼だった。たしかにその一か月ほどまえに長女が誕生しており、かわいくてたまらなかった時期であった。

梅里雪山の遭難の後、数次にわたり救援や捜索に現場に向かったのだが、あるときの北京空港で、待っているはずのアテンドがなかなか来なかったことがある。書面を見せるだけでプラ段の箱も開けずに通関したのだが、迎えが来てないし外が寒そうだったので、廊下に出ずにぐずぐずしていたら、彼が、「こんなとこさっさと出ましょうよ」と言ってきた。それもそうかなと思っていたら、案の定、旅客が引けて暇になった税関の職員がこの箱の中味はなんだとかかんだとか言ってきたので、人見の言うようにしとけばよかったとちょっと後悔したこともあった。

人見は、カンペンチンの以降、海外遠征に行くたびに、後輩たちを率いて行儀の悪いこともやっているようだったが（どうやら五大陸制覇などということらしい）、そうしたことがうわさにならないところも状況を読むことがうまいせいか。

それはさておき、彼は目標があると、それに向かって道筋をつけることが実に上手だった印象がある。そこの部分が劣る人間にしてみると、彼の全身から「世渡り上手」というオーラがモリモリでている気がしたに違いない。九州の私学に奉職してから、その大学の山岳部を再興した話など、実に面目躍如たるものがある。新入生歓迎セレモニーのクラブ紹介にほかの体育会クラブの学生に混じって、教員一人だけで壇上に立ち、現役部員のいない山岳部への勧誘を行う話など、聞いていてちょっとありえない。きっと部員がいなくても予算もうまく取っていたに違いないのである。その甲斐あって、彼に会うたびに自校の山岳部の活動自慢を聞かされるのであった。従って、一時期、京大山岳部にコーチ制を導入するかどうかという議論が笹ヶ峰会のメーリスでなされていた時、かれは当然のようにコーチ制導入に大賛成だった。たしかに自前で教育できれば、わざわざ文登研に行って明治OB達の指導を仰ぐ必要もないわけだ

が、KUAC的にはコーチ制というのは受け入れがたいものがあったらしく、実現することはなかった。（コーチ制については、われわれも総括の必要な事態に迫られたので書くことはいくらでもあるが、この号の主旨からはずれるのでやめておく。）

おそらく、彼は、自校の山岳部を率いてヒマラヤに向かうことを考えていたに違いない。それが実現する前に自分の事情で断念せざるを得なくなったことは、これまでの彼の生き様からは、およそ想像できないことだ。実に残酷なことだと思う。

人見五郎さんを偲んで

吹田啓一郎

人見ハイガさんは山岳部の一年上の先輩で、大学院を終えるまでの一〇年ほどの学生生活の間、私にとって山の関係で最も付き合いの多かった人である。山岳部を卒業して就職した仲間とは顔を合わせる機会がずっと減るが、彼も私も大学院まで長く京都に居残っていたので、何かと一緒に過ごすことが多かったのだと思う。それにもかかわらず、振り返ってみると山岳部時代から人見さんと一緒に行った山行は合宿以外にほとんどなく、またAACKに入ってから海外遠征でいろいろな活動があったのだが、結局、海外の山を一緒に登る機会もなかった。

私が学生だった一九八〇年頃は中国の山が外国人に開放され始めたときで、ルームでもチベット側からヒマラヤへアプローチする計画が立てられた。いろいろな未踏峰を目標にしたプランが検討され、若手の部員たちもそれぞれの思いをぶつける対象を模索し、他の大学や山岳会としのぎを削って登山許可の獲得に奔走していた。そんな中、ハイガさんは学部生のとき早々に一九八二年のカンペンチン峰遠征に参加し、海外への志向を強めていった。中国の未踏峰を登るための交渉にはかなりの政治力が必要であり、AACKの総力を挙げて交渉に臨んでいたが、それとは別に山岳部の若手を中心にブータンを目指す動きもあった。こちらも長く外国人の入山を拒んできたが、ようやくトレッキングコースが解放され始めたときであった。一九八三年の夏にはブータンヒマラヤを周回する踏査隊が山岳部中心に組織され、私はこちらの方に参加した。ガンケルプンツムを始めとするブータンの未踏峰を目の当たりにしてきた私たちは、帰国後すぐに次の遠征対象の検討に入り、翌一九八四年には偵察隊を派遣してさらに詳しく現地を調べてきた。こちらの方にはハイガさんが参加し、その結果、一九八五年のマサコン峰遠征隊の計画が立てられた。共にブータンでの初登を夢見て活動していたのだが、結局、私はチベットのナムナニ隊に入り、ハイガさんはマサコン隊に入ることになって、それぞれ別の山を初登頂してきた。

ようやくハイガさんと行動を共にすることができたのは、マサコン峰遠征隊成功のお礼と記念の意味で大型の双眼鏡を寄贈するために二人でブータンへ向かった一九八八年のことである。なぜ私がこの役にあたったのか詳しい経緯は忘れたが、確か、ニコンの大型双眼鏡を用意したのだがこれを設置する架台が無いので、建築を専攻している私がその台座を設計し、知り合いの鉄工所の方に頼んで現地で傷んだりしないようにステンレス製のかなり丈夫なものを製作してもらった。事情を説明したら親善のためにと無償で提供していただくことができた。これを現地で据え付けるにも工事が必要なので、その交渉をするために私が加わったのだったと思う。ただ、いきなり双眼鏡を持って行ってどうぞ使ってくださいと言っても、それなりの形で残さないと意味が無いのでそのあたりの対応は、交渉に長けたハイガさんの担当であった。二人でいろいろと相談して準備をしたのだが、誰にどんな土産を用意するか考えるのはハイガさんの役だった。彼が言い出したのは、現地の人は高級な化粧品などめったに手に入らないから喜ぶはずだ。でも、買うと高くつくから無料の試供品を集めて持って行ったらいいだろう、という妙案だった。たまたま私の親戚が薬局を経営していたので、そこに事情を説明して、これも大量に無料で試供品をいただいてきた。こんなことで、若造二人が親善大使気取りでブータンの観光局へ向かった。

ティンプーに着いて最初にとりかかったのが、観光局との交渉であった。観光名所でブータンヒマラヤを一望できるドチュ・ラ峠があり、そこのレストハウスに設置させてもらうこと、設置の工事をブータン側で負担してもらうことを依頼するために、ツジ・ノルブ観

光大臣の自宅へ赴いて交渉することになった。会ってみると、瀬戸わんやのような風貌の大臣で頭の方はつるつるしていたが、ハイガさんは臆することなく、これ使ってください、上等ですよと試供品のシャンプーやリンス、化粧品などを大臣に渡していた。大臣も、自分は使えんが妻と娘が喜ぶでしょうと笑いながら受け取ってくれた。こんなやり取りをしながら、話はうまく進み、双眼鏡設置の話も快諾していただくことができた。早速、翌日からドチュ・ラへ行き、すぐに現地の業者に説明して工事が始まった。木造のきれいなレストハウスの床を剥いで架台をコンクリートで固め、ヒマラヤの方に開いている窓は枠が邪魔になるので全部取り外して大きな窓ガラスに取り替え、かなり大胆な工事を三日ほどでやってくれたお陰で、すぐに立派な展望台が完成した。完成披露の式典では大臣も双眼鏡を覗いて迫力のあるヒマラヤの姿に感嘆の声をあげ、新しい名所ができたと喜んでくれた。これもハイガさんのキラキラと目を輝かせながら楽しそうに人を説くことがうまい人柄のおかげで万事がうまくいったのだと思う。

ハイガさんとは山のことなどで相談することが多く、彼の下宿によくお邪魔していた。そんなある日、彼が占い師に占ってもらったことを話してくれた。実はあまりいい話ではなかったらしい。今のあなたの運勢はとても悪いということを言われたらしいのだが、それを楽しそうに話してくれて、「俺は今、なんにも自分が不幸だと思うことがない。運勢が悪いときでもこんなに楽しんで生きているのだから、本当に運勢がよくなったら、どんなに楽しいことがいっぱいあるのか、そう思うとうれしくて仕方ない」などと言っていた。なんと天性の楽天家であることかと感心したのをよく覚えている。

そんなハイガさんがかなり重い病気にかかっていると聞いたとき、案外、なんとも無かったように直ぐに治るのではないかと、ハイガさんの事ゆえ私も何となく楽天的に考えたことがあった。だけど、結局、帰らぬ人となったのはなんとも残念でならない。他愛のないことばかり書いてきたが、彼はどんな局面でも次々と新しいことを前向きに進めるためのアイデアを考えつくのがうまくて、それを常に実践していた。彼がもっと長く元気でいてくれたらと、改めて思うことが多い。心からご冥福をお祈りします。

ＹＭＣＡ主事宅の日々

伊藤宏範

京大正門前の東一条通を吉田神社とは反対方向の西に向かい、東大路通を越えてしばらく行くと、北側に四階建ての京大ＹＭＣＡ地塩寮がある。全寮で三十人ほどのそれほど大きくない学生寮である。寮生の中に山岳部員が数人はいた。この寮は学部学生のみであるが、大学院生は同じ敷地内にある木造二階建て四、五部屋の「ＹＭＣＡ主事宅」に入っていた。

ぼくは吉田寮生であったが、地塩寮には部員がいるし、「ヒゲパン」を焼くのにオーブンを借りたり、屋上から大文字がよく見えるので、五山の送り火の日の大文字パーティーに行ったりとしょっちゅう出入りしていたものだった。寮外生であっても、だれでも気楽に訪問できる雰囲気があった。

この寮に山岳部二年上の人見五郎さんが住んでいた。ぼくと山岳部同回生の山田和人も住んでいた。人見さんと山田は二人とも一九八〇年十二月三十一日の剱岳赤谷尾根遭難隊のメンバーである。遭難直後は、なぜ山に登るのか、いかにして危険を避けるかなどと議論を続けた。結論として、なんとか登り続けながら考えようとなった。

この二人は一九八二年四月と一九八三年四月にそれぞれ大学院に進学したので、隣の「主事宅」に引っ越した。地塩寮のときと同じように、今度は「主事宅」に出入りするようになる。ぼくは卒業して、大阪の会社で働き、大阪の社員寮に住んでいたのだが、何かにつけて京都に出かけていた。居心地のいい「主事宅」は人見さんの人当たりのよさそのものであった。

遭難と前後して中国がチベットなどの未踏峰を解禁することになり、ＡＡＣＫでもかねてから狙っていた未踏峰をめざそうとなると、その動きを感じて現役にも海外の山が身近に感じられるようになる。

第一にめざすは、西チベットのグルラマンダータ七七二八ｍ。この山名の響きに現役生はワクワクしたものだ。人見さんは、京大山

岳部に入るために、わざわざ京大に入学してきた。遭難をバネに、海外登山に積極的に取り組んでいた。しかし、なかなか許可されない。そこで、一九八〇年春のＪＡＣチョモランマ隊に参加した横山宏太郎さんらが、以前、ネパールから狙っていたランタンリ七二三九ｍの偵察に一九八一年秋、中国側から出かけた。しかし、同時期にネパール側から初登頂されてしまい、近くのカンペンチン七二八一ｍに転進、翌年本隊が結成された。山岳部五回生の人見さんは隊員となったが、三回生のぼくは選ばれなかった。本隊は一九八二年春に挑み、人見さんをはじめ全員初登頂を果たした。登山中に人見さんは大学院に進学した。登頂隊員のほとんどが、赤谷尾根遭難時の現役あるいは大学院生として山岳部の山行に参加しているメンバーであった。

この成功を機に、次はようやく、同志社大学、中国登山協会との合同で念願のグルラマンダータ（中国ではチベット名でナムナニ峰、高さも七六九四ｍに変更）に向かうことになり、一九八四年春の先遣隊に山田が加わり、翌八五年の本隊のルートを見つけてきた。

一方、現役山岳部でも独自に海外登山をめざしていた。一九八二年夏にインドヒマラヤの未踏峰ＣＢ31峰六〇九六ｍの初登頂に成功。次はブータンの未踏峰に向かった。一九八三年夏に調査隊をだし、八四年夏にガンカープンスム（ガンケルプンツム）七四五一ｍの偵察隊に人見さんが隊長として出かけた。人見さんとしては、ナムナニもブータンも両方とも魅力的であったが、ブータンに集中することにした。

ガンカープンスムは国境問題でルートが開けなかったので、急遽、ブータン国内にあるマサコン峰七二〇〇ｍ（六八〇〇ｍ？）の一九八五年の許可を得て、帰国した。

こうして一九八三年から八四年にかけて、「主事宅」の大学院生二人組は、研究どころではなくなった。八五年本隊出発までにやることはヤマほどある。着慣れぬスーツを着て、企業回り、ジャージーに着替えて、隊荷の準備と目の回るような忙しさである。

社会人二年めのぼくもナムナニ隊のメンバーになったので、大阪の会社と京大のルームと伏見の登山隊事務所の間を駆け回る日々であった。会社を辞めて参加することになり、辞める二か月前に少ない生活道具一式とともに「主事宅」に転がり込むことになった。それも、人見さんの八畳間の部屋である。サラリーマンが学生の部屋に居候していると、人見さんはおもしろがってあちこちで紹介してくれていた。

朝三人分の軽い朝食を誰かが作り、夜も三人で何かを作って食べる。ほかにも「主事宅」には大学院生が二人いたので、たまにはみんなで一緒に食べる。作ったり、後片付けをしたりするのが苦になるものはいなかった。大阪の会社は勤務時間がかわっていて、夕方から始まり、夜中までやって、会社で泊まり、翌日の午前中から午後の早い時間まで仕事で拘束される。だから、一週間のうち、二晩はいないので、べったりいっしょではなかったが、よく居候をおいてくれたものだとありがたかった。人見さんの明るい飾らない性格が幸いしていたのであろう。

忙しい中でも、山岳部の仲間やその友人たちを招いて、壮行会を開いた。隊員を励ますというふれこみで、「一流登山家のヒナを育てる会」と呼んでいた。人見さんが声をかけると、山岳部以外でもいろいろな人たちが集まってきた。この会は、登山から帰って、今度は報告会と称して開いた。以前から開いていた大文字パーティーと同じノリで、楽しい会であった。今、振り返ってみると、数年にわたって続いていたそのときのメンバーで、パートナーを見つけたのが四人いる。人見さんが会を開いていなければ、そうなっていなかったであろう。

さて、居候はときに、論文のチェックもさせられた。研究者のタマゴは山に行くとはいえ、本業の論文もおろそかにできないらしい。ただ、完ペキという漢字を「壁」と書く人見さんだから、漢字はよく間違えていた。耳がいい（このため、人見さんは外国語が得意であった。チベットやブータンの言葉も）のと、本をよく読んで難しい言葉が頭に入っているのはいいが、いざ書こうとすると手がついていかない。辞書を引くという面倒なことをしない。簡単なのは、校閲の本職に見せることである。というわけで、内容がほとんどわからないのに読まされて、漢字のチェックをしていたわけである。

また、人見さんが手紙を書いているとき、二階の部屋から一階の食堂に大きな声で「〇〇という字はどう書くんや？」とぼくに尋ね

てくる。「それはニンベンを書いて」といっても反応がないので、「カタカナのイを左に書いて」とかなり具体的に言わないと通じなかった。便利な辞書であったろう。

大阪の会社には一九八五年三月末ぎりぎりまで行った。ナムナニへ出発まで一週間。四月のはじめに日本をたち、五月の終わりに隊は初登頂に成功し、七月の初めに帰国した。無職でもあり、住むところも確保していなかったので、また、「主事宅」の人見さんの部屋に転がり込んだ。

マサコン隊ではナムナニ隊から二人隊員を採ろうということになり、ドクターのほかにぼくが行くことになった。ひょっとしたら、人見さんが同室のよしみで推してくれたのかなと思う。一緒に中国から帰った山田は学業に戻ることになる。ここで戻らなければ、追い出されると言っていたが、戻っても結局は大学院を修士課程で修了し、畑違いの企業に就職することになった。無職で気楽なぼくはまた、人見さんと一緒に目の回るような忙しさの中に突っ込むことになった。

人見さんは、ぼくが帰った一か月後の八月初め、先発隊としてブータンに向け、飛び立った。しばらく人見さんの部屋に独りで住むことになる。隣の部屋の山田は勉学にいそしんでいる。ぼくは本隊のメンバーとして八月下旬に出国した。この間に、日航機の墜落事故が起こった。ぼくらが乗ったカルカッタへ向かうインド航空の飛行機も途中で修理するというハプニングもあった。それでも九月はじめに、人見さんたち先発隊とようやく合流した。一か月の登攀活動ののち、十月十三日から十五日にかけて、三次にわたって初登頂に成功した。「主事宅」での忙しく、楽しい日々の締めくくりであった。

ひとみハイガさんの思い出

山田和人

一九七九年の四月、これから始まる学生生活にワクワクしながらも不安で胸が一杯だった時のこと。

まずは東一条のＹＭＣＡ地塩寮に入寮を決め、次に山岳部のルームを訪ねました。その時に、寮にいたのと同じ人がルームにいることに気付きました。寮では人見さんと呼ばれていた人がルームのハイガさん。瞳がキラキラした三回生でした。地塩寮に戻って部屋の片付けをしていると、早速ハイガさんが部屋に訪ねて来て「俺の部屋に来い」と。コーヒーをご馳走になりながら話している内に学部学科まで同じであることが分かりびっくり。

寮レクチャーと称して寮での立ち居振る舞いからポジションの取り方、寮生の位置関係、女友達の連れて来かた etc... を面白おかしく語ってくれました。続いて山岳部の活動について。岩魚釣りの極意や岩登り最中のアクシデント対処方法、吹雪の中で冬山テントに転がり込んでまず初めにやることは何か等、シーンが目に浮かぶ話を懇々と語っていました。後で気付いたのですが学部学科の話は全くなし。とにかく、全ての話が具体的で情景が目に浮かび、それがキラキラと輝いていました。完全に引きずり込まれている自分に気付いたのは、しばらく経ってからでした。

そんなことで僕の学生生活は、ハイガさんの影を踏みながら始まりました。兄か姉の存在を空想的に求めていた僕は、無意識に兄貴分としてハイガさんを見ていたように思います。

二回生の時、僕は厳冬期剣岳北方稜線パーティーに加わることになりました。六回生リーダーの六人パーティーで、ハイガさんはその中核となる四回生、僕は最下級生。準備万端整えて入山したのですが、後に五六豪雪と呼ばれた悪天が十二月中続き、パーティー

1985年７月　芦生演習林

は赤禿から撤退することになりました。大晦日、一週間ぶりの青空が広がる中、赤谷山からの下り深雪ラッセルに若い身体にも疲労が溜まっていきました。目線の下に馬場島が見えてあと一息だと思ってまもなく、痩せ尾根をトップで空身ラッセルしていた僕の直後から雪が崩れ、後続の二人が雪塊と一緒に白萩川へ落ちていきました。午後二時過ぎのことでした。四番目を歩いていたハイガさんは雪庇断面の雪壁にピッケルで停止。リーダーは二人の捜索のために白萩川に下り、別パーティーと合流。テントと燃料、食料の一部は失っていなかったことが幸いで、残った三人は尾根上に留まって一晩を過ごしました。遭難が確実になった現実を突きつけられ、かろうじて作ったラーメンを一口も食べられないまま涙を流していた僕に、ハイガさんのきつい言葉が刺さりました。「目を瞑ってでも飲み込め、俺達は絶対に馬場島に辿り着かなアカンのや！」怖い目がキラキラしていました。

大学院に進学した僕は、西チベットの処女峰ナムナニ峰遠征隊の隊員として偵察隊に参加することになりました。この遠征隊は、日本と中国の合同登山隊で、しかも日本側はAACKとDAC（同志社大学山岳会）との合同という政治色の強い成り立ちの隊でした。最年少で遠征が初めての僕は戸惑うことも多く、既にカンペンチン峰遠征で経験を積んでいたハイガさんから色々とアドバイスを受けながら遠征準備を進めていました。しかしある時点から、ハイガさんの言動が少し煩わしいものに思えてくるようになりました。遠征隊の中でAACKのプレゼンスを如何にしてアピールするのか、というような課題を次々と出してくるハイガさんに、僕はついに切れてしまいました。暫くの沈黙の後、ハイガさんは「ゴメン、お前の遠征が羨ましくて…」と言葉少なに言いました。瞳は、奥の方で少しだけキラキラしていました。

一九八五年、ナムナニ峰本隊の出征祝いは、ハイガさんがとびっきりの演出で祝ってくれました。「一流登山家の雛を育てる会」と称して色々な人、特に若い女性に声をかけ、木造の店の床が抜けるのではないかと思う程のドンチャン騒ぎをしました。ハイガさん自身もその数ヶ月後にブータン遠征を控えていました。全員の目がキラキラしていたかもしれません。

その後、ハイガさんは九州に仕事・生活の拠点を定め、僕は千葉／大阪となり、山に一緒に行くこともなくなっていきました。仕事で九州に行った時には連絡して、博多で酒とラーメンをご馳走になったこともあります。学生時代のように誇張を含んだ面白おかしい話は少なくなりましたが、穏やかな表情の中にもあの瞳は健在で安心したことを覚えています。

一昨年の夏、ハイガさんが病気だと聞き北九州の病院に行きました。腸閉塞の手術後ということもあり、すっかり痩せてしまったハイガさんでしたが、あの瞳の輝きは健在でした。その後、何回かお見舞いに行きました。しかし輝きは徐々に弱まっていったように記憶しています。

日々を楽しくする術を教えてくれたハイガさん、挫けそうな時に生きることを気付かせてくれたハイガさん、あくせくしない生き方を示唆してくれたハイガさん、そんなハイガさんは、瞳のキラキラを僕の脳裏に焼き付けて少し早く逝ってしまいました。

ご冥福を祈ります。

ありがとう。ハイガさん。

中山茂樹

一九八〇年四月。

一年生は部室に置かれた大きなテーブルの最前列に座らされ、その対面の中央にリーダーとして座っているのがハイガさんでした。「ああ、この人は大学のクラブのリーダーなのか。豪いもんだ。」というのがハイガさんに対する第一印象でした。

水曜会は、一年生の自己紹介のあと、各パーティーの山行計画の説明に入り、クラブのリーダーであるハイガさんのパーティーの説明になったのですが、開口一番「北山ルンルン山行、行ってきま～す。」というようなチャラチャラしたことを言って最上級生席の部室の最後列から厳しいお叱りの声が飛んだのでした。（その人が『バスコ』というとっても怖い六年生であることはその時はまだ知りませんでした。）

そもそも山岳部の例会が水曜日で、探検部の例会が木曜日だったもので、一日先に行われる山岳部の水曜会に出席したのち、翌日の

探検部の例会には結局行かないまま山岳部員になったのですが、一回目の水曜会で自分自身が山岳部に馴染んだような氣がしました。

水曜会、金毘羅合宿などを経てだんだんと、（むしろ結構はやくというべきでしょうか）ハイガさんの楽しさ、適当さを理解するようになりました。足を白いギプスで固め、赤ヘル（もちろんガリビエールの山用ですが）を前にドンと置いて東京弁でまくしたてるグズラサブリーダーとは好対照でありました。まずはハイガさんの京都弁のおかげで山岳部に打ち解けたことは間違いありません。

その後、実のところハイガさんとはあまり一緒に山に行った記憶がありません。もちろん私が一年生の冬に赤谷尾根での事故が起こり、その後は捜索が続いていましたし、二年生になって私は日高山脈に魅せられて日高に通うようになったのですが、日高はハイガさんの趣味ではなかったようです。

山には一緒に行きませんでしたが、地塩寮での大文字パーティーやら、宴会にはよく呼んでもらっていました。誰もが言うことですが、キラキラ輝く大きい目がハイガさんの強力な武器で、その目の輝きに吸い寄せられるようにかわいい女性がたくさん遊びに来るのでした。

赤谷尾根の遭難の反省ののち、私たちは再び山を登り続けることになるのですが、しばらくしてブータンヒマラヤの遠征計画が持ち上がって来ました。前年のルナナ地方のトレッキングや、ガンケルプンツム（当時私たちはそう呼んでいました）の偵察山行を経て、一九八五年にマサコンの初登頂を目指して出かけることになりました。

マサコンの登山隊の隊長は堀了平先生で、登攀隊長が横山宏太郎さんでした。当時からすでに宏太郎さんはその上のＯＢの方々の信頼はあつく、我々隊員にとっても安心感、安定感を感じる登攀隊長でした。その隊の中で学生連中のリーダーとしてパーティーを引っ張ってくれたのがハイガさんだったのですが、そして参加メンバーの全員が認めることと思いますが、ハイガさんがこの隊を登頂成功に導く大きな役割を果たしたのでした。

最初のうちは順調に下部ルートの工作を進めて来たのですが、上部のルート工作にあたってハングした大きな雪壁に行く手を阻まれることになりました。空身でアブミを使ってルートを開くことは不可能ではなさそうでしたが、正直なところ誰がそれをやれるのか皆自信がなかったのだと思います。その場の全員がもたもたしていたことをよく覚えています。

そんな中、突然ハイガさんが雪壁の右へ延々とトラバースをして偵察して来ると言い出し、ロープでビレイをとるように指示し、そうしてどんどんと先へ進んでいくのでした。どう考えてもその先は何百メートルも落ちる絶壁で落っこちた先は大きな氷河になっており、そんなところにルートがあるとは誰も考えなかったのですが、そしてそのような考えだったものですから誰もが「やれやれ」という気持ちでハイガさんの動きを見守り、見えなくなってずいぶん長い間戻りを待っていたように思えました。

ハイガさんはすっかりニコニコ顔になって姿を現し、戻って来ました。

とにかく快挙でした。恐ろしく切れ落ちた雪壁に「どうぞここを通って」と言わんばかりの氷雪のバンドが進む方向に続いているのでした。もちろん相当以前に崩壊したその痕跡がバンド状になっているだけですから大変不安定で狭いところは本当に靴幅しかないようなルートですし、さらにその先の壁から尾根上のもとのルートに戻るには結構真剣な壁を直登しなければなりませんでしたが、本当に快挙でした。

このことから何か教訓めいたことを引き出すつもりも何もないのですが、ハイガさんのおかげでマサコンに初登頂することが出来たのでした。ハイガさんありがとう。

マサコンの登山の後、カンペンチン、ナムナニ、あるいはムスターグアタやシシャパンマ、梅里雪山といった海外の山にＡＡＣＫは登山隊を派遣するのですが、そして私もハイガさんもそれぞれに登山隊に参加したのですが一緒に登った山はありませんでした。

そうこうするうちに梅里雪山の第二次隊で大変大きな、悲しい遭難が起こりました。一七人もの隊員が一度に亡くなったのでした。一九九〇年の正月のことでした。

そして一九九六年に第三次隊を結成して梅里雪山の初登頂に挑むことになるのですが、その時に私も参加し、ハイガさんが登攀隊長を務めることになりました。

ハイガさんも私も先発隊として中国に渡り

ました。何者かよくわからない通訳が北京から合流し、車で入れる最後の集落の西当からたった二日の行程のベースキャンプまでなかなか進むことが出来ず、途中の雨崩でかなり長い間足止めを食い、先が思いやられる日々でしたがハイガさんの脳天気とも思える明るさに救われ、いろいろある中ベースキャンプに到着し、本隊到着に先行してルート工作を進めることが出来ました。二次隊で亡くなった最年少隊員の同級生であるバコヤシも大活躍してくれました。ふだん日本でやったことのないダブルアックスでもってルートを開き大変楽しいルート工作を私自身もさせてもらいました。

ところが或る日、天候が大きく崩れるという通信が行動中に全員に流れパーティーは浮足立ちました。結局全隊員がベースキャンプに戻って悪天候をやり過ごすことになったのですが、そのベースキャンプに戻る途中で崩壊地からの落石が頻々と起こりフィックスロープが何か所も寸断され結び直されているのを見ました。結局のところ悪天候はやって来ませんでした。ここで書き記すにはあまりにも面倒な紆余曲折があったのですが登攀隊長のハイガさんが登山活動中止を決め登山隊は撤収することになりました。

私自身も登山再開を勧めない立場でしたが、帰国するや「なぜ登らなかったのか」というご批判ばかりを頂き、矢面に立たされる立場であった登攀隊長のハイガさんはまことにお気の毒でした。我々がベースキャンプを撤収した後、すぐに笑農（ベースキャンプの場所）を呑み込む雪崩が起こったと後で聞くことになるのですが、誰ひとり欠けることなく帰国しても只ただ「なんで登らなかった」とご批判を頂くのみでした。ハイガさんには本当に申し訳なく思っています。一次隊の横山宏太郎さん、二次隊の井上治郎さんと比べられ、そのお二人は絶大な信頼を大ＯＢ達から得ておられたのに対し、ハイガさんは頼りなく思われていたのでしょうか。その上、もっと性質の悪い怪文書まで出回る始末でした。さぞや口惜しかったことでしょう。

私もその横に居て少なからず愉快ならざる思いをしておりましたが、ハイガさんは九州に生活の場を移し、京都から、あるいは笹ヶ峰からはるか遠くの雪の降らない街の暮らしを続けて来られたために普段お目にかかることも少なくなり、またハイガさん自身もヨットの遊びやら学生さんの指導やらで山から離れて行かれました。それでも私が九州に出張に行ったときに声をかけますと大学の先生方を連れて、あるいはまた大阪市大山岳部ＯＢと連れもって博多の街を連れまわしてくれました。山から離れ、会うことも少なくなったものですから、梅里雪山の三次隊以降ハイガさんがどんなに九州で、大学で信頼を得て若い人たちに敬愛され、慕われているかということをあまり具体的に知ることはありませんでした。

奇しくもお葬式に参列し、当日参列がかなわなったハイガさんの教え子の弔事が代読されたのですが、この弔事によって私はまさに確信することが出来ました。自分達の結婚式の仲人をする約束を反故にされたこと、ヨットで人生を語り合ったこと、親より大切という程の存在であったこと、この先頼るべき人を失って途方にくれていることなどが綴られていました。

九州に住まわれ、山から離れたおかげで、そのために私たち山屋の友人からは少し離れてしまったのですけれども、それというのももちろんご本人の強い意志があってのことですし、またヨットのことにしても京大に残っておられるときに琵琶湖で猛特訓をしてスキルを身につけたものですし、この流れにはハイガさんの強い志向を感じるわけなのですが、ひとから絶大な信頼を得、敬愛、思慕される人になられたことは実に嬉しいことでした。

私は何分にも軽薄ですからハイガさんのあほなところしか受け継いで行けないかもしれませんがハイガさんから頂いたものを後進に伝えて行きたいと思います。

ありがとう、ハイガさん。

私の京大山岳部
一九六〇年代を中心に
（連載・第二回）

吉野熙道

あだ名

また話が飛ぶが、あだ名について。

一回生でヒュッテ番を長く続けた時、さすがに単調なおかずに音を上げた私たち一回生三人が談合し、町に買い出し部隊を送った。他の者は肉っけのものなどを欲しがったが、私はなけなしの財布をはたいて「コッペパンを三〇個買ってきてくれ」と頼んだ。もう米はごめんや、という気分だったのだ。私はそのパンを一回で全部食ってしまった。あきれた他の連中は、即、「お前のあだ名は〝コッペ〟」と宣言した。おかげで、七一歳となった今でも私は〝コッペ〟という可愛らしい名前で通っている。たまに人を見る目がない奴が、「鬼のコッペ」などととんでもないデマを流して中傷するが、そんな奴の言うことは決して信用してはいけない！敢えて言う。〝仏のコッペさん〟が正しいのである。

筆者若き頃のスケッチ

山岳部ではほとんどの部員にあだ名がつく。入部早々についてしまうのが普通である。これが一生ついてまわることになる上に、いつのまにかそのあだ名にピッタリの風采、人格になっていくから、これはおそろしい。私の例などは由来を説明すれば、なるほどと納得されるあだ名、すなわちかなり高級なあだ名である。しかしあまりにも単純でつまらんあだ名もある。たとえば、前田司などは〝ツカサ〟であだ名というにはおこがましい。松田隆雄は〝ランプ〟であるが、これは「マツダランプ」という電球の商品名からのまったく単純な命名にすぎない。さらにかわいそうなのは、「今度入部してくるやつのあだ名を考えるのはめんどくさいから、来た順に〝一平〟、〝二平〟、〝三平〟にしようや」などという横着な上級生の犠牲になった者もいる。この例で生き残ったのは、〝サンペイ〟、〝ゴヘイ〟くらいのものである。東京などに行く機会があって、一流会社に就職している先輩に（一杯おごってもらおう）と、受付で面会を申し込んだのはよいが、肝心の本名が出てこないことも多い。まさか住友商事の将来人事部長となる野村高史氏を呼んでもらうのに「えーっと〝ズッパさん〟に会いたいのですが」と言いかけて（しまった！えーと、たしか、名字は野村だったな、わしより二年上だからあ、三七年入社のはずだ）と思い当たり、「昭和三七年京大から入社した野村さんをお願いします」などとやったことも一回や二回ではなかった。またどういうわけか、いくらあだ名をつけられてもそれらが全て固定せず、一生あだ名ナシという山岳部員らしからぬ不幸な運命に甘んずる者もいる。人格が確立していてあだ名など受け付けないからだったとも言えるが、そんな人間はいつも「おい、木村よ」などと呼ばれる一種の屈辱に耐えねばならない。

もし子や孫が京大山岳部に入りたいなどと言い出したら、「自分でよいあだ名を考えておいて、入部時にそれを否応なく受け入れさせろ。先手必勝や」と助言すべきである。

ダンス・パーティー

部の財政に関しての別のエピソードがある。私が三回生でリーダーの時である。二回生の虎見厚介（バーテン）が「ダンス・パーティーをやろう」と提案してきた。彼はチャキチャキの江戸弁をしゃべる、ダンスなどお手の物といった感じのダンディー男だった。当時は大学のいろいろなクラブが資金集めのために、やたらにダンス・パーティーをやっていたのだ。相当儲かるという噂は聞いていた。上級生たちのほとんどは「山岳部がそんなことを！沽券にかかわる」といった雰囲気で反対した。私もそこまでしなくてもなあ、と消極的であった。だいたいダンスなどまったく無縁の人間ばかりなのだった、いや、そう言うと正確ではない。実は宮木靖雅（トク）は以前からフィアンセとペアを組んでダンス

の競技会に出場するほどの腕前なのであった。「悪・徳」と並び称された彼の親友の安原啓示（アク）などは、「いい奴なんやけど、軟弱な……」と嘆いていたが、本人はどこ吹く風と堂々としていた。もちろんパーティーには賛成であった。とうとう私も賛成に踏み切った。部には何か事故でも起こった時に対処できる資金的余裕はまったくなかったから、わずかでも貯金が欲しかったのだ。それからが大変だった。虎見は同志社女子大の山岳部に交渉して、パーティーの共同開催と予行演習の約束まで取り付けてきた。約束の夜御所の芝生に集まって、虎見や同女の子の指導を受けて、初歩的なステップ練習に汗（本当は冷や汗だったが）をかいた。結果は大成功で、いくらだったか、たしか数万円の実収入を獲得できた。「山岳部、なかなかモテるんや！」と悦に入ったことだった。上級生の反対派もそれ以上何も言わなかった。

インドラサン初登頂一九六二年一〇月[1]、遭難、西イリアン遠征

二回生だった頃の私たちを中心に学生による初のヒマラヤ遠征を実現しようという機運が高まってきた。ちょうどこの頃は、AACKがチョゴリザのあと長年狙ってきたカラコラムのサルトロ・カンリの許可を取りつけて、すでに準備を進めていた。AACK内には、サルトロの募金だけでもしんどいのに、現役までとは無理でないか？という意見もあったようだが、それぞれの募金先が重ならないように調整する、ということで了解された。

山岳部長の多田政忠・理学部教授を初め多くのAACKの人たちも、大学山学部現役学生を中心とする初のヒマラヤ遠征隊ということで積極的に支援してくださり、小野寺幸之進・農学部教授を隊長、ノシャック初登頂者の酒井敏明（オシメ）さんを副隊長に決定した。酒井さんはまだ地理学博士課程の院生であった。学生隊員の構成は四回生一人、三回生二人、二回生一人と決まって、各回生がそれぞれのやり方で専攻を行った。我々二回生はある寒い夜吉田山に集まり、冷酒を飲みつつ立候補による選考を行った。当初から熱心なヒマラヤ推進者であった岩瀬時郎が立候補して訥々と抱負を語り、全員に支持された。私自身はもちろんヒマラヤに行くために山岳部に入ったのだが、この時は、自分はもうしばらく国内山行に集中してもっと力をつけてからだ、と決めていた。

実は、私と岩瀬時郎、水瀬昭典（サウド）の同級生三人はみな東京出身で、そんなことは前代未聞だったのだ。新入生の自己紹介の時には、上級生たちが「アンナーへ、こりゃー、東大の陰謀やでー！京大をブッツブソーっちゅうのや」とドッとはやしたてたものだった。実際一年後には私がリーダー、岩瀬と水瀬がサブリーダーになったのだから、あながち冗談とも言えなくなった。ある時私たち三人は東京で落ち合い、登山家としても知られた小説家の深田久弥氏宅を訪ねてヒマラヤの話を聞いた。氏は親友三人とともにランタン・ヒマールとジュガール・ヒマールを訪れ、美しい写真があふれた報告書を出版し、この本はAACKの「花嫁の峰 チョゴリザ」とともに私たちを魅了していたのだ。氏はまた京大に対して大変好意的であり、何時間も私たちに付き合ってくださり、感激した私たちは「私たちは三人とも必ずヒマラヤに行きます」と氏の前で宣言した。これはややちがった形とはなったが、このインドラサン遠征からたった二年のうちに実現した。

隊員は、大森義次（ゲジ）、田中二郎（ジロウ）、宮木靖雅、岩瀬の四人に決まった。山はインド、パンジャブ・ヒマラヤのピルパンジャール山群中の未踏峰、インドラサン（六二二一m）に決まった。

遠征隊は一〇月一三日にインドラサンの初登頂とデオ・テイバの登頂を果たして、一一月二九日以後順次帰国した。インドラサンは急峻な岸壁を擁し、困難な登山であったが、現役山岳部員の力はヒマラヤでも立派に通用することが証明された。

一〇月山の後、慣例により山岳部のリーダーは三回生に交代し、私はリーダーに選ばれた。

しかしインドラサン初登頂の喜びのさなか、一一月山行で穂高縦走中のパーティーの二回生の加納洋（セイハク）が北穂高岳・滝谷C沢右俣に滑落し行方不明となった。リーダーの杉野弘恭（シメチヨ）たちは谷を下降し捜索を試みたが、まだ浅く不安定な積雪・着氷と悪天候のため、断念して下山した。在京の部員とAACK会員、山行から帰ったばかりの部員が順次救援に向かった。同時に朝

日新聞社に依頼して、天候回復後すぐ小型機による現場の視認・写真撮影を行なってもらったが、手掛かりはつかめなかった。結局遺体は発見できないまま年を越した。その後北穂の小屋に切れ目なしに捜索隊を入れ、また滝谷下流からも監視を怠らず、遺体や遺品の流失防止のために下流にしっかりした柵も設けた。すべての山行は中止を原則とし、笹ケ峰ヒュッテでの合宿のみとした。

ついに六月、遺体が発見され、上高地で荼毘に付された。加納は戦後の山岳部における三人目の犠牲者となった。ヒマラヤ遠征の成功によって過大な自信を抱いて、力量以上の山行をしたのではないか？など、深刻な反省の気分が部にみなぎり、活動は低迷した。

ところがそんな時に突然、ニューギニア遠征、それも探検部との合同遠征という話が持ち上がった。一九六三年五月、オランダ領だった西イリアン（イリアン・ジャヤ：西部ニューギニア。インドネシア領となったが、その後紆余曲折を経て二〇〇〇年六月「パプア」として独立）のインドネシア帰属を記念するために、親日家だった当時のスカルノ大統領が、両国合同の登山隊をニューギニア最高峰である「カールステンツ・トップ」（五〇三九m、後「スカルノ・ピーク」、現在は「ジャヤ山」）に送るという提案をしてきたのだ。この山は未踏峰ではないが、頂上付近には氷河を抱くという。この地の全土はほとんどが深い熱帯雨林におおわれている、現地の住民は多くの部族に分かれて言語も通じないほど、互いに争っては首狩りをする、いまだにほとんど鉄器を知らず石器時代の生活をしている、等々さまざまな断片的情報が飛び込んできた。

ＡＡＣＫ、探検部と話し合い、部内でカンカンガクガクの討論が交わされた。なにしろ遭難がやっと片付いたばかりだ。たしかにめったに出会えない面白い遠征なのだが、山の対象としては未踏峰ではないし、政治的に利用されるだけだという意見が多かった。しかし、四回生の水瀬と三回生の松田（ランプ）は「こんな時だからこそ行きたい」と、参加を強く希望した。吉野は内心このような遠征もパイオニアー・ワークであろうと思っていたので、最終的には参加の方向を支持した。結局ＡＡＣＫの安江安宣・農学部教授を隊長とし、田附重夫（ガイガー）・東京工業大学助教授、探検部関係の二名と山岳部の二名の隊員、さらに朝日新聞社の後援が決まって、同社から探検部の創設者である本多勝一氏、写真部の藤木高嶺氏という隊が成立した。同隊はインドネシア陸軍の精鋭部隊とともに無事登頂を果たして、多くの珍しい経験と収集品、情報を得て帰国した。

本遠征隊に関しては、本多勝一[2]も参照されたい。

国内の山でトレーニング

日常のトレーニングとしてはマラソンが主体であった。一回生の時は宇治川沿いを爽快な気持で走ったり、かつて広大な湿地帯として存在した小椋が池のわずかな名残に泳ぐ水鶏の甲高い鳴き声を聞いたり、水面にポカリと浮いている雷魚を驚ろかせたりしながらのんびりと走ったりしていた。二回生になってからは専らルームから大文字山の「大」の字の中心まで息を切らせながら駆け上がるのを常とした。しかしある時などは比叡山の根本中道まで足をのばしたり、また我ながらやったぞと思ったのは、雲母坂を比叡山四明岳までの急坂を駆け上った時だった。

走ること以外では、サーキット・トレーニングという筋肉トレーニングが流行った。数分ずつ腕立て伏せなど数種の運動をなるべく早くこなすのだが、お互いに記録を競った。私は腕立て伏せや懸垂が誰よりも多い回数をこなせた。腕立てではなく三本指だけの指立て伏せの記録は一分で軽く一〇〇回を超えた。

また低く張ったひもに触れないように足から潜り抜けるリンボーダンスは大のお気に入りで、二五cmというのが私の自慢の記録だった。

岩登り

私は岩登りが大好きだった。京都市内唯一の岩登りゲレンデである金毘羅山には入部後まもなく行われた岩登り訓練以後、暇さえあれば通った。最初のうちは上級生と一緒でなければ許されなかったが、馴れたらすぐに一回生同士で行くようになった。飯盒飯にしばづけと魚肉ソーセージの昼飯だけで、飽きもせずに一日中遊ぶのは実に爽快で楽しかった。五月以降本格的な山行が始まってからも他人よりも精出して通い詰めて、どんどん自

信をつけていった。誰よりも速く滑らかな動きで登れるようになりたかった。同回生の中には不得手で嫌いな者も多かった。初の剱合宿で、八ツ峰登攀中の鹿児島大のパーティーが転落・死亡事故を起こした。運悪く落ちる人間を目撃してしまって、岩恐怖症に拍車をかけた者もいたようだ。

二回生の時に、当時は上級ルートとされていた前穂高の新村ルートを登った。この時はトップで我ながらスムーズな動きでスピーディーに最難関のオーバーハングを乗っ越せた。その時、下で拍手と歓声がした。見下ろすと、登攀の順番待ちをしている他のパーティーが拍手してくれたのだった。うれしくて手を振ってますますスピードアップして登り切った。

私はいくら食べても太らない体質で、六〇代半ばでガンになるまで、ずっと体重五五kgを維持したが、それもあってか体が柔らかく、さらに筋肉トレーニングの成果もあって、皆から「ヨガのコッペ」などと呼ばれていた。岩登りと同様、沢登りも大好きで、川原などでは走るように石から石へと飛び移っていった。歩くのも登るのも速く、北岳では九〇〇mの高度差を四〇分足らずで駆け上がったこともあった。

雪山

雪山で思い出深いのはいくつもあるし、槍・穂高の冬山などの厳しい良さもあったが、二回生の春に私が発案して、会津朝日岳から会津駒ヶ岳、桧枝岐村へと抜けた山行は、北アルプスなどと違って高度は低かったが、穏やかでいかにも日本の春山らしい良さがあった。入山後しばらくはヤブ漕ぎばかりで往生したが、稜線に出てからは岩場などほとんどなく、好天続きで、なだらかで長大な尾根歩きを楽しんだ。桧枝岐村の旅館では美人の若女将が出してくれた手打ち蕎麦をたらふく食べた。

卒業後は専ら一年下の山本武久(サンペイ)と組んで登った。彼はバランスもよく体力もあって、私はパートナーとして全面的に信頼していた。彼は日大山岳部の先輩仕込みで、修験者じみた風貌を持っていた。ザックの中の整理がとてもきっちりしていた。いつも同じ小さな箱を持っていて、我々が何かを必要とする時彼に聞くと、たいていの小物はその箱からまるで手品のように取り出してくるのだった。当時の国鉄の学割運賃は通常運賃の五割だったが、彼の場合は父親が国鉄職員なので、家族割引で一割かそこら、我々をおおいに羨ましがらせた。学割はそのうちに、三割、しかも年間一〇枚に制限されてしまった。なお彼は原子核工学科の秀才であったが、後に大学紛争の最先兵となり、京大時計台に立てこもって火炎瓶を投げて最後まで機動隊に抵抗した。結局執行猶予つきの有罪判決を受けた。熱血漢の一面を持っていた。そんなわけで一流企業にも就職せず、卒業後は小さな土建会社の住込みガードマンとして生計を立てていた。私は製薬会社の外回りで出張手当が多く、結構金回りは良かったので、しょっちゅう京都に行っては彼や後輩の山岳部員たちと酒を飲んだ。神戸から車で丹波篠山を抜け京都に行く途中、猪の肉を買ったり、さらに遠回りをして日本海の小さな港で安い雌の子持ちズワイガニを買ったり、琵琶湖で鯉を買ってきたりしては、ルームや誰かの下宿で鍋を囲んで酒盛りなどというぜいたくをした。

後で直接サンペイに聞いたのだが、時計台事件で逮捕された後に彼を取り調べた京都府警の警部さんと意気投合して、判決確定後はその人に頼まれて子供さんの家庭教師をしたということだった。感心するほどの前向き志向の男で、いろいろなことに挑戦して、この時期に土地家屋調査士その他の土建関係の国家免許のほとんどを取ってしまい、社長からずいぶん頼りにされたらしい。また後の話になるが、自分の会社を作り、トライアスロンにも熱中して、最近は自分が主催する鉄人チームと海外遠征までしていると聞いた。

二人で冬の槍ケ岳の北鎌尾根に行った時だった。北鎌尾根自体はスムーズにこなした。しかし槍の頂上から肩の小屋に下る段になって、我々は青くなった。ツルッツルの蒼氷がべったりと逆層の岩をおおっていた。珍しくサンペイがビビっているので、「何しとんのや、しっかり下りろ。ばっちり確保してやるわ」とハッパをかけた。しかし私の番になると本当にひやひや物の下降であった。前を向いて下りると、アイゼンのツァッケがツツーっと滑ってしまうのだった。死ぬ思いで上体を前に倒してこらえていると、ギリギリのところでどうにか止まってくれる。一歩一歩がそうなのだった。私はそれまで山で怖い

と感じたことなど一度もなかったが、この時ばかりは心底怖かった。

剱の早月尾根に行った時は、ツェルトだけを持っての雪洞泊りだった。ところが尾根の中ほどに達した時から雪が降り止まなくなって、毎日がチンの連続となった。来る日も来る日も一瞬の休みもなく降り続けた。毎朝雪洞の入り口が一m以上も雪で埋まっていた。そのうち雪洞の天井と壁は体温とラジウスの熱で溶けては凍るのを繰り返して、だんだんツルツルで広いドームになった。朝など霜がダイヤモンドのようについてこの上ない美しさになった。一週間以上降り続いた雪もやっと止んだ。これなら回復する、しかしまだどうなるかはっきりしないから頂上は諦めて下山しだした。一人三mも進めない胸を没するラッセルに苦労したが、やがて太陽が出た。他のパーティーとも合流できてからは、ラッセルの負担も減った。新雪雪崩がいくつも落ちていて、下に降り着くと〝雷の岩屋〟もすっぽりと雪に埋もれていた。まさかこの下に誰か閉じ込められてるんじゃなかろうな、などと冗談を言っていた。しかし実際にそこには雪崩で埋められた遺体があったことを後で知った。歩いていくと、下から大部隊が上がってきた。よく見ると、AACKや山岳部の連中だった。「どないしたんや?・!」と聞くと、相手の方がびっくりして、「お前らを探しに来たんやないけ、よう言うわ」と返された。聞けば、我々の入山後、新聞が「登山届も出さない無謀登山者」として、我々が剱に向かったことを報じたそうだ。しかし馬場島の小屋の箱には計画書を入れてきたはずなのに。本当は事前に富山県警に提出して許可を得てから入山しなければいけないらしかった。入山前の富山では、会社の同期生で富山大山岳部出身で金沢支店に赴任していた親友の小島隆雄君に歓待されて、すばらしいスッポン料理をご馳走になっていた。その上、馬場島まで車で送ってもらったりしてご機嫌だったのだ。現役時代には考えられなかった、ぜいたくな山行になるはずだったのだ。

救援隊に聞くと、現役の前田栄二（オヤマ）をリーダーとするパーティーやその他多数の登山者の下山が遅れていて、遭難者も出ているとのことで、京都から大救援部隊がやって来たのだという。急遽我々も彼らに合流して、また上に向かうことにした。それをラジオのニュースが「下山してすぐに仲間の救援に向かった」美談として報じたのを聞いた。サンペイと二人、「どや、不敵に笑う無謀登山者や、写真撮って」と笑いあった。幸いに打って変った好天が続いて、オヤマたちも無事に帰った。この冬はものすごいドカ雪で、各地で遭難死者が続出したのだった。

雪崩

ドーンと大砲を打ったような音が聞こえた。一回生一一月、最初の雪山である富士山でのアイゼン合宿入山初日、歩き出してまもなくの時だった。なんだ、と見上げると、吉田大沢の広い斜面が引き裂かれていた。雪崩だ！とにかく急いで上がった。まもなく累々たるデブリに出っくわした。すでにかなりの人数の登山者が捜索にとりかかっていて、やがて自衛隊の部隊もやってきて、組織的な救助活動が始まった。各人に細く長い鉄棒（ゾンデ棒）が渡され、横一列に並んで雪に突き刺して遺体や遺品を探っていくのだった。初めて知ったが、ゾンディーレンというのだそうだ。初めての雪山初心者にはかなり刺激が強かった。（当たるなよ、当たるなよ）と念じながら進んだ。時々何かフニャッした感触があると、（わー、やってしもうたー）と不埒な思いに申し訳ないとは思いつつも、しかたなく掘り出しにかかる。幸い（?）サブザックでほっとした。この時は一五人も死んだ戦後最大の雪崩遭難なのだった。最後の一日だけの雪上訓練でなんとか予定をこなせた。

また、ある時、残雪期の北岳バットレスに岩登りに行った。これも入山の日、バットレスの下の方にたくさんの人間が動いているのが見えて、嫌な予感がした。雪を登って行った時、前方に何か雪にささっているものが見えた。近づくとなんと、人間の手の先ではないか！富士山の時のような顕著なものではないが、やはりあたりは締まったデブリだ。またも雪崩に当たってしまったのだ。掘り出すのは他のメンバーがやることになり、私一人が大急ぎで上の捜索をしている登山者に知らせに上がった。遭難者は東京都庁山岳部の人で、後にお礼としてラジウスをいただいた。

ガネッシュではすんでのところで、雪崩に巻き込まれるところだった。まだ登攀ルートが決められず、隊長の樋口明生（ジャン）さんと二人で左手、ククリ尾根と呼んだ尾根の

方に偵察に出た時、突然上から落ちてきた。かなり左に外れるだろうと見ていると、あっという間に裾が広がってこちらに向かってきた。えらいこっちゃ、と逃げ出しかけて見ると、樋口さんは八㎜カメラをまわしていた。片目をつぶっているので、遠近感がわからないらしい。「ジャンさん、急いでー」と絶叫して逃げた。爆風と雪煙を浴びはしたが、もう平気だろうと振り返ってみると、雪崩の奔流の中を物置小屋ほどもある岩や大小さまざまな大きさの氷塊がすっ飛んでいくのが見えた。後で現像した樋口さんのカメラの画面は雪煙に隠されていた。この後よく観察していると、ここはガネッシュ最大のラビーネン・ツークだったのだ。まだヒマラヤの感覚が身についていない時期で、危ないところであった。

ガネッシュ初登頂後にダウラギリ南面に入った時に見たデブリは、針葉樹の大森林の中に入り込んでいて、大木が何本もなぎ倒されていた。夜になると狼の遠吠えが響いていた。翌朝雪の上に記された、新しいくせに予想以上に大きな無数の足跡には驚いた。

ヤルン・カンでもこれらよりはるかに壮大で、高度差二〇〇〇m以上にもなろうというラビーネン・ツークがあった。BCから左手にはジャヌーの東肩が聳え立つていた。気温が上がるとそこからはいつも大雪崩が落ちた。モクモクと雪崩の先端が走り下りた、というより、下から雲が湧き上がるかのように雪崩が上に伸び上って行くように見えた。最大の雪崩の時はBCに爆風が吹き付け、いく張かのテントがなぎ倒された。

引用文献・参考資料

(1) 京都大学山学部：「インドラサン登頂」、河出書房新社、東京、1964。

(2) 本多勝一：「ニューギニア高地人」、朝日文庫、東京、1981年。

日本山岳協会山岳共済会および山岳遭難・捜索保険の案内

〈二〇一二（平成二四）年度〉

AACK事務局

日本山岳協会の山岳共済会および山岳遭難・捜索保険の二〇一二年度の加入方法などの案内です。加入を希望される方は下記の要領で手続きを行ってください。

この山岳遭難・捜索保険は、「日本山岳協会山岳共済会」が契約者となる団体傷害保険です。したがって、この保険を申し込み、被保険者（補償の対象者）となるには、「日本山岳協会山岳共済会」の会員になる必要があります（保険加入と同時に申し込む）。

AACKでは、この保険に加入する条件として、山行の一週間前に、AACK担当者へ登山計画書を提出することとしていますので、ご承知おきください。これは山岳共済が定める保険金支払の条件ではありませんが、保険対象となる事故発生時にAACKが会員の皆様に対して対応するときに山行内容を把握しておく必要があるために対応をお願いしているものです。

日帰りハイキングなどの軽登山をされる方には、保険料の安い軽登山コースが用意されています。ハイキングといえども高齢の方にはどのような事故に遭遇するとも限りませんので、そのような方には万一に備えてこのコースがお薦めです。詳しくは後の説明をご覧下さい。

山岳共済会の海外保険の加入の有無に拘わらず、海外登山やトレッキングの場合も必ず山行計画書を提出して下さい。また、海外山岳コースの保険に加入すると海外登山での遭難捜索費用等が支払われ、国内・海外両方に加入されていると、加入コースにより両方から保険金が支払われます（詳細は一（六）参照）。

現在、制度の運用に必要な業務は横山宏太郎様、永田　龍様にご協力をいただいています。以前と担当者が交代していますので、連絡先などの変更にご注意ください。

一、山岳遭難・捜索保険の種類

二〇一二年度から、個人賠償責任補償のないタイプが加わりました。

「個人賠償責任補償あり（一億円）」の場合、国内山行を対象に、山岳登攀コースと軽登山コースの二つのコースが用意されています。山岳登攀コースには八種類、軽登山コースには二種類のタイプが用意されています。

「個人賠償責任補償なし」の場合も、上記

と同様のコース、タイプが用意されています。保険料の差額は、四八〇円です。

以上の中からいずれか一つだけ、希望のコース・タイプを選んで加入します。表に示した保険料に、年会費一〇〇〇円を加えた合計支払金額を払い込みます。

また、海外での登山やトレッキングを対象にする海外山岳コースは、（五）にあるとおり個別に見積もりをとり、加入します。

（一）山岳登攀コース（個人賠償責任補償あり）は表1の八種類です。

（二）軽登山コース（個人賠償責任補償あり）は表2の二種類です。初心者でも可能な一般登山道での普通の登山（夏山登山で雪渓を越えるために軽アイゼンを使用した場合も対応する）が対象です。軽登山コースの場合は山岳登攀コースと異なり、疾病が原因となる捜索費用は補償の対象となりません。

（三）「個人賠償責任補償なし」の山岳登攀コース、軽登山コースのタイプはそれぞれ表3の通りです。

（四）山岳登攀コース、軽登山コースのいずれのコースも山行中のみならず、日常生活でのケガも補償の対象になります

（五）通年の場合、期間は毎年四月一日午前〇時から翌年四月一日午後四時までです。継続の方は、前年度の契約終了の四月一日午後四時から、新年度の契約が有効となります。中途加入も受け付けられます。五日までに申し込むと当月一五日午前〇時から保険開始となり、二〇日までに申し込むと翌月一日午前〇時から保険開始となります。保険料は開始月ごとに設定されています。

（六）海外山岳コースは、基本契約タイプの一種類だけです。保険金額は次のとおりです。昨年と同様に、遭難捜索費用には緊急救助ヘリコプター費用も保証されることを確認しています。

死亡・後遺障害　百万円
救援者費用　五百万円
個人賠償責任　一億円

保険料は、対象の山岳、日数により個別に見積もられることになっていますので、海外登山又はトレッキングに行かれる方は、事前に横山様を通じ山行計画を提出して、保険料の見積もりを取得して下さい。

国内と同様に、山岳共済会の会員であることが加入の条件になります。国内の山岳遭難・捜索保険に加入している場合は、表4の通り、一部は海外でも保険対象となります。

海外の保険料は平成二二年一〇月一日より値上がりしました。また、七〇歳未満と七〇歳以上とでは保険料が異なり、七〇歳以上の方は救援者費用保険料が高くなっています。

参考までに、過去の保険料の事例を示します。

（A）二〇一一年の阪本公一さんたちのザンスカール（インド・ヒマラヤ）遠征四三日間のトレッキング：一人あたり保険料二六二〇円。

（B）二〇一一年の村上正康さんたちのアンナプルナ内院トレッキング、二六日間：一人あたり保険料　二二九〇円。

（C）二〇〇九年の安仁屋政武さんたちのチュルーウエスト（ネパール・ヒマラヤ）登山、期間：三一日　一人あたり保険料　七一〇〇円。

（D）二〇〇八年の阪本公一さんたちのネパール・ヒマラヤ（ロールワリン）ラムドン・ピーク（五九二五m）登山（期間：四〇日間）：一人あたり保険料　九〇七〇円。

二、加入の手続き

加入を希望する方は、必要事項を明記した加入申込書を、AACKの指定する山岳共済担当者（横山宏太郎様）に提出し、指定の銀行口座に保険料＋年会費一〇〇〇円を振り込んでください。

（一）加入申込書には次の九項目を記入してください（書式自由、メール本文に記入も可）。

①氏名（フリガナ）
②生年月日（例：昭和二二年五月二一日）、四月一日の満年齢
③郵便番号と住所（フリガナ）
④電話番号、FAX番号
⑤電子メールのアドレス（ある場合）
⑥職業名・職種名
⑦加入コース・タイプ、振り込み金額（保険料＋年会費の合計額）
⑧同種の危険を補償するための他の保険契約があるか

ある場合は、被保険者氏名、保険種類、死亡・後遺障害保険金額、入院保険日額、通院保険日額を記載

⑨過去三ヶ年間にケガで保険金（五万円以上）

を請求又は受領したことがあるか
ある場合は、被保険者氏名、保険会社、回数、合計金額を記載

担当者の連絡先は次の通りです。原則として電子メールでお送り下さい。

電子メール：peng-y@amy.hi-ho.ne.jp
FAX　：025-524-8216
郵便　：〒943-0832
上越市本町2-1-12-801
横山宏太郎

（二）保険料＋年会費の振込口座（申込みと同時に振り込んでください）
銀行：第四銀行稲田支店（ダイシギンコウイナダシテン）店番号514
口座番号：普通預金1241931
名義：AACK山岳保険　横山宏太郎
（エーエーシーケーサンガクホケン　ヨコヤマコウタロウ）

（三）年間を通じての保険加入の募集締め切りは三月二〇日（山岳共済事務センター着）です。今年は案内が遅れて、この締め切りは過ぎてしまいましたので、これからの申し込みは途中加入（一（五）参照）の扱いとなります。担当者（横山様）へ申し込みと保険料＋年会費の振込みをしていただければ、手続きをします。

手続き完了の翌月に日本山岳協会から会員証（加入者証）が担当者に送付されてきますので、担当者から本人に転送します。会員証

—表1—

山岳登はんコース

●「山岳登はんコース」とは，傷害事故による死亡・後遺障害・入通院*に加え，遭難捜索費用保険金がセットされております。（入通院はセット型，セットなし型があります。）
＊死亡・後遺障害・入通院については，国内・海外を問わず，標高6000m以上の高い山以外であれば山岳登はんの場合にもお支払いすることができます。
●日本国内においてアイゼン・ピッケル等を用いた登山（山岳登はん）中に遭難したことによって支出した費用をお支払いします（加入タイプによって限度額が異なります）。もちろん，前記の登山用具を用いない登山（軽登山）中の遭難費用もお支払いたします。

例）・ご加入者様が山岳登はん中に遭難し，警察によって救出された際に発生した費用
・ご加入者様が下山予定期日を経過しても下山せず，親族が捜索を地元の消防団に依頼した際に発生した費用

ご注意していただきたいこと

①このコースの死亡・後遺障害・入通院については，国内・海外を問わず，標高6000m以上の高い山以外であれば山岳登はんの場合にもお支払いすることができます。ただし，遭難時の費用（遭難捜索費用保険金）につきましては日本国内の登山のみが対象となります。海外において山岳登はんを行われる方は，加入していただく保険が異なります。詳しくは日本山岳協会山岳共済事務センターもしくは引受保険会社にお問い合わせください。
②山岳登はんとは，ピッケル，アイゼン，ザイル等の登山用具を使用する登山。山岳登はんコースには，ロッククライミング（フリークライミングを含む），冬山登山等を含んでいます。
③遭難捜索費用保険では，日本国内において山岳登はんの行程中に遭難した場合に，疾病が原因でもお支払対象となります。

職種級別A

（1）保険始期日が4月1日の方

〈山岳登はんコース〉								
保険金額	契約基本タイプ							
タイプ名	1S	S	1B	B	1C	C	1E	E
死亡・後遺障害	100万円	100万円	159万円	159万円	235万円	235万円	500万円	500万円
遭難捜索費用	100万円	100万円	150万円	150万円	200万円	200万円	500万円	500万円
入院保険金日額	1000円		1000円		1500円		2500円	
手術保険金※	○		○		○		○	
通院保険金日額	600円		600円		900円		1500円	
賠償責任	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円
保　険　料	**6,450円**	**3,900円**	**8,260円**	**5,710円**	**11,540円**	**7,720円**	**23,940円**	**17,570円**

※手術保険金は，手術の種類に応じ入院保険金日額の10倍，20倍，40倍の額をお支払します。

（2）中途加入の方（保険始期日が4月1日以外の方）の保険料　（円）

加入タイプ	1S	S	1B	B	1C	C	1E	E
4月	6,450	3,900	8,260	5,710	11,540	7,720	23,940	17,570
5月	5,910	3,580	7,570	5,240	10,590	7,080	21,950	16,110
6月	5,380	3,250	6,890	4,760	9,610	6,430	19,950	14,640
7月	4,840	2,930	6,200	4,290	8,660	5,790	17,960	13,180
8月	4,300	2,600	5,510	3,810	7,700	5,150	15,950	11,710
9月	3,770	2,280	4,830	3,340	6,730	4,500	13,960	10,250
10月	3,230	1,950	4,140	2,860	5,770	3,860	11,980	8,790
11月	2,690	1,630	3,440	2,380	4,820	3,220	9,990	7,330
12月	2,150	1,300	2,750	1,900	3,840	2,570	7,990	5,860
1月	1,620	980	2,070	1,430	2,890	1,930	6,000	4,400
2月	1,070	650	1,370	950	1,930	1,290	3,990	2,930
3月	550	330	700	480	960	640	2,000	1,470

＊：手術保険金は、入院保険のついた契約の場合（タイプ名の頭に「1」がついている）、手術の種類に応じ、入院保険金額の10倍、20倍、40倍の額が支払われます。

の有無は保険の効力には影響ありません。

三、加入者の山行・登山計画書の提出

加入者は山行時に次のことを守って下さい。

（一）ＡＡＣＫでは、日帰りハイキング以外のすべての山行（沢歩き、岩登り、積雪期の登山、及びすべての泊まりがけの山行）で登山計画書を提出することとしています。

（二）登山計画書には次の事項を記入して下さい。

登山目的、日程、ルート、メンバーの氏名・年齢・住所・電話番号、留守本部、最終下山日、共同及び個人装備、食料（実働・予備日明記）

（三）登山計画書の提出先は永田様です。できる限りワープロなどで作成したファイルを電子メールに添付して nagata@ka2.so-net.ne.jp へお送り下さい。入山日の一週間前には提出し、変更があればその都度ご連絡ください。

（四）下山後、永田様へ速やかに電話やメールで下山報告をしてください。

（五）永田様が担当するのは登山計画書のとりまとめで、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で定めてください。万一の事故発生の時の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

（六）登山計画書を提出しない方は次年度の加入をお断りします。

—表２—

軽登山コース

●「軽登山コース」とは，傷害事故による死亡・後遺障害・入通院*に加え，救援者費用等保険金がセットされております。（通院はセット型，セットなしがあります。）

＊死亡・後遺障害・入通院については，国内・海外は問いませんが，山岳登はん以外の初心者でも可能な普通の登山の場合にお支払いすることができます。

●山岳登はん用具を用いなくても対応可能な登山中の捜索・救助活動に対する費用をお支払いたします。

例）・ハイキング中，遭難してしまった際に発生した捜索・救助費用

・屋内でのクライミング（ただし、下に衝撃吸収マットを敷いた高さ３～４メートル程度の石垣や露石、人工壁を、プロテクションを使わずに手足のみで登る行為も含む）中に滑落した結果、死亡された場合の死亡保険金

※ピッケルやアイゼン，ザイル等を使用していた場合，軽登山コースでは捜索・救助活動に対する費用をお支払いたしませんのでご注意ください。

ご注意していただきたいこと

①このコースでは，山岳登はん用具を用いない登山であれば，日本国内外問わず，登山中の捜索・救助活動に対する費用（救援者費用等保険金）をお支払いたします。

②救援者費用等保険金は急激かつ偶然な外来の事故による費用ですので，疾病が原因で事故が発生したときは，救援者費用は補償の対象外となります。

※ピッケルやアイゼン，ザイル等を使用しないで登れる軽登山行為をいいます。

※屋内でのクライミング（ただし、下に衝撃吸収マットを敷いた高さ３～4メートル程度の石垣や露石、人工壁を、プロテクションを使わずに手足のみで登る行為も含む），ボルダリングは対象となります。また救援者費用は山岳登はん以外の初心者でも可能な普通の登山でも対応します。

職種級別Ａ

（１）保険始期日が４月１日の方

〈軽登山コース〉		
保険金額	契約基本タイプ	
タイプ名	Ⅰ	Ⅱ
死亡・後遺障害	１５０万円	２５０万円
救援者費用	３００万円	３００万円
賠償責任	１億円	１億円
入院保険金日額	２，０００円	４，０００円
手術保険金	手術の種類に応じ入院保険金日額の10倍，20倍，40倍の額をお支払いします。	
通院保険金日額		１，５００円
保　険　料	**2,140円**	**5,470円**

（２）中途加入の方（保険始期日が４月１日以外の方）の保険料

(円)

加入タイプ＼開始月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
Ⅰ型	2,140	1,960	1,780	1,610	1,430	1,250	1,070	890	710	540	360	180
Ⅱ型	5,470	5,010	4,560	4,110	3,650	3,200	2,740	2,270	1,820	1,370	910	460

＊：手術保険金は、手術の種類に応じ、入院保険金額の 10 倍、20 倍、40 倍の額が支払われます。

—表３—

個人賠償責任の補償がないタイプ

は、本ページの保険料となります。

○山岳登はんコース<職種級別A> ※級別Bの保険料は、山岳共済事務センターにご照会ください。

（１） 保険始期日が4月１日の方

<山岳登はんコース>								
保険金額	契約基本タイプ							
タイプ名	１L	L	１M	M	１N	N	１P	P
死亡・後遺障害	100万円	100万円	159万円	159万円	235万円	235万円	500万円	500万円
遭難捜索費用	100万円	100万円	150万円	150万円	200万円	200万円	500万円	500万円
入院保険金日額	1,000円		1,000円		1,500円		2,500円	
手術保険金※	○		○		○		○	
通院保険金日額	600円		600円		900円		1,500円	
保険料	5,970円	3,420円	7,780円	5,230円	11,060円	7,240円	23,460円	17,090円

※手術保険金は，手術の種類に応じ入院保険金日額の10倍・20倍・40倍の額をお支払いします。

（２） 中途加入の方（保険始期日が4月1日以外の方）の保険料 （円）

加入タイプ	1L	L	1M	M	1N	N	1P	P
4月	5,970	3,420	7,780	5,230	11,060	7,240	23,460	17,090
5月	5,470	3,140	7,130	4,800	10,150	6,640	21,510	15,670
6月	4,980	2,850	6,490	4,360	9,210	6,030	19,550	14,240
7月	4,480	2,570	5,840	3,930	8,300	5,430	17,600	12,820
8月	3,980	2,280	5,190	3,490	7,380	4,830	15,630	11,390
9月	3,490	2,000	4,550	3,060	6,450	4,220	13,680	9,970
10月	2,990	1,710	3,900	2,620	5,530	3,620	11,740	8,550
11月	2,490	1,430	3,240	2,180	4,620	3,020	9,790	7,130
12月	1,990	1,140	2,590	1,740	3,680	2,410	7,830	5,700
1月	1,500	860	1,950	1,310	2,770	1,810	5,880	4,280
2月	990	570	1,290	870	1,850	1,210	3,910	2,850
3月	510	290	660	440	920	600	1,960	1,430

○軽登山コース<職種級別A> ※級別Bの保険料は、山岳共済事務センターにご照会ください。

（１） 保険始期日が4月１日の方

<軽登山コース>		
保険金額	契約基本タイプ	
タイプ名	Ⅴ	Ⅵ
死亡・後遺障害	150万円	250万円
救援者費用	300万円	300万円
入院保険金日額	2,000円	4,000円
手術保険金	手術の種類に応じ入院保険金日額の10倍・20倍・40倍の額をお支払いします。	
通院保険金日額		1,500円
保険料	1,660円	4,990円

（２）中途加入の方（保険始期日が４月１日以外の方）の保険料

加入タイプ	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ⅴ	1,660	1,520	1,380	1,250	1,110	970	830	690	550	420	280	140
Ⅵ	4,990	4,570	4,160	3,750	3,330	2,920	2,500	2,070	1,660	1,250	830	420

四、その他

（一）山岳共済会の山岳遭難・捜索保険の案内パンフレットを、AACKのウェブサイトに置きました。加入される方は、内容を確認してください。

（二）日本山岳協会のホームページにも説明があります。ただし、情報の年度にご注意ください。

山岳共済会
http://www.jma-sangaku.org/kyosai/profile/
保険について
http://www.jma-sangaku.org/kyosai/insurance/

（三）山岳共済に関する疑問点や、更に詳しい説明が必要な場合は、担当の横山様にお問い合わせください。原則として電子メールで

—表４—

	海外トレッキング	海外山岳登はん		海外トレッキング	海外山岳登はん
山岳登はんコース加入者	国内保険適用分	国内保険適用分	海外旅行保険追加ご加入者	海外保険適用分	海外保険適用分
死亡・後遺障害	○	○	死亡・後遺障害	○	○
遭難捜索	×	×	救援者費用	○	○
個人賠償	×	×	個人賠償	○	○
入院（加入者のみ）	○	○			
通院（加入者のみ）	○	○			
軽登山コース加入者	国内保険適用分	国内保険適用分	海外旅行保険追加ご加入者	海外保険適用分	海外保険適用分
死亡・後遺障害	○	×	死亡・後遺障害	○	○
救援者費用	○	×	救援者費用	○	○
個人賠償	×	×	個人賠償	○	○
入院	○	×			
通院（Ⅱ型のみ）	○	×			
山岳共済会のみのご加入者	国内保険適用分	国内保険適用分	海外旅行保険のみご加入者	海外保険適用分	海外保険適用分
死亡・後遺障害	×	×	死亡・後遺障害	○	○
救援者費用	×	×	救援者費用	○	○
個人賠償	×	×	個人賠償	○	○
入院	×	×			
通院（Ⅱ型のみ）	×	×			

○は海外での保険対象（お支払い事由は国内と同様です）
×は海外での保険対象外

お願いします。アドレスはpeng-y@amy.hi-ho.ne.jpです。

表１～３は、日本山岳協会山岳共済事務センターの資料から転載したものである。

会員動向

新入会員

小阪健一郎
京都府立医科大学　在学中

会員異動

芝田正樹会員
勤務先削除

渡辺勉会員

編集後記

今号では昨年に亡くなられた会員のうち五人の方への追悼文をまとめて掲載しました。故人をよく知る方々の筆のおかげで、生前のご活躍のご様子やお人柄が十分偲ばれたことと思います。ところで会員の多くが高年齢である当会では寂しいことではありますが、毎年何人かの会員を見送らねばならぬことがありましょうが、これだけはどうしょうもありません。編集子としてはニュース性には欠けますが、一年の締めくくりの号にお亡くなりになった方の追悼の分を掲載させていただくことにします。

次号六一号は遅れをとりもどすべく、すでに編集に入っております。そこで六二号（八月末日発行予定）用の原稿を募集します。原稿締め切り　六月二〇日。

発行日　二〇一二年四月末日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松林公蔵
発行所　〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
竹田晋也　気付
編集人　前田　司
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
㈱土倉事務所